地域づくり

本編

2024
7
ISSN1340-8917

明日を開く、地域活性化のための情報誌



特集　水辺の観光まちづくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

地域づくり　2024-7

CONTENTS

1 巻頭エッセー／千葉開府900年に向けた　～緑と水辺のまちづくりプラン～
神谷俊一（千葉県千葉市長）

特集 水辺の観光まちづくり
四囲を取り巻く広大な海と、豊かな川や湖に恵まれた日本。あらゆる面で生活にかかわり、身近な存在である水辺の価値を見直し、新しい可能性を見いだして観光や地域活性化につなげている取り組みを紹介する。

2 基調論文 水の特性を巧みに生かす　大下　茂（(株)KITABA相談役・内閣府地域活性化伝道師）
6 佐原おかみさん会（千葉県香取市）　小野川の流れにこころ癒やされて　平塚智子
8 一般社団法人土佐町スポーツコミッション（高知県土佐町）　さめうらダム湖から広がるまちづくり　古賀智志
10 副基調論文 文化、環境、防災から見た現状と展望　安本達式（公益社団法人日本観光振興協会総合調査研究所副所長）

【特集編では基調論文、全８事例を全て掲載～特集編のみに掲載される事例は以下の通り】
●然別湖ネイチャーセンター（北海道鹿追町）　然別湖と共に　齋藤夏月
●一般社団法人十和田奥入瀬観光機構（青森県十和田市）　唯一無二の自然景観を生かす　安藤巖乙
●NPO法人ORGAN（岐阜県岐阜市）　観光まちづくりで持続可能な好循環を　蒲　勇介
●公益財団法人松江市観光振興公社（島根県松江市）　歴史と未来を感じる堀川遊覧船　足立薫平
●愛媛県愛南町　海辺の絶景を走って巡る　蓮田修平
●長崎県島原市　名水百選に選定された湧水のまち　吉田将尚

レギュラーリポート
14 地方創生フォーラム in 東京
AI×地方創生
16 海外調査報告　スイス①
多文化共生の社会へ
17 海外調査報告　スイス②
「サイクリングのまち 加須市」定着のために
18 トピックス
こどもが好きな海の遊びは?
20 連携団体の取り組み　嘉悦大学
「問いを立てる」フィールドスタディ
岩月基洋
22 センター通信
ふるさとの魅力発信を応援します！
24 首長の思い
「こだまでしょうか、いいえ、だれでも。」
江原達也（山口県長門市長）

グラビア
23 都道府県漫遊　【茨城県】
手前みそですが…　【福岡県糸島市】

表紙 倉敷美観地区

倉敷美観地区は、江戸時代初期に幕府の直轄地である「天領」として定められた地区で、遠浅の海と倉敷川を利用した物資輸送の集積地として発展してきました。倉敷川沿いには、柳並木や川舟、江戸時代から残る白壁の蔵屋敷と洋風建築が調和した美しい景観が広がり、どこを撮っても絵になることから、撮影をしながらまち歩きを楽しむことができます。

現在は、「帆布」「デニム」といった倉敷ブランドがそろうおしゃれなショップや、町家を改装したカフェなどが軒を連ね、岡山県を代表する観光地として、年間３００万人を超える方が訪れております。

日没後には世界的な照明デザイナーの石井幹子さんがプロデュースした、町を照らすライトアップも行われ、白壁の建物が川面に映し出されます。昼も夜も美しい景色が広がる倉敷美観地区の町並みをお楽しみください。

問い合わせ先＝倉敷市文化産業局文化観光部観光課（０８６・４２６・３４１１）

（岡山県倉敷市）



くらしき川舟流し。
結婚式や七五三での写真撮影では貸切予約もできる

（写真提供＝倉敷市）

ESSAY

巻頭エッセー

千葉開府900年に向けた

～緑と水辺のまちづくりプラン～



千葉県千葉市長 ● 神谷　俊一

令和5年の千葉市の人口動態は全国8位の5088人の転入超過となり、子育て世帯の多い30～40代を含め全年齢層での超過となりました。転入理由をアンケートで伺ったところ、都市機能の中に緑と水辺が身近に感じられる住環境を挙げられる方が多く、日本一の総延長を誇る人工海浜、内陸部の里山や谷津田、関東の政令市の中で最も広い人口当たりの都市公園面積など千葉市の特長であった都市と自然のハイブリッドな環境が、新型コロナ禍でテレワークが進んだライフスタイルの変化を転機により好まれるようになってきていると考えています。

千葉市の強みになっているこの環境をさらに磨いていくために、縄文の昔から育まれてきた豊かな緑と水辺のストックを引き継ぎ、住みやすく、訪れたくなる、持続可能なまちづくりを次世代に継承していくことを展望する「緑と水辺のまちづくりプラン2023」を策定しました。グリーンインフラの考え方に基づく取組を推進し、河川を活用したまちづくりと都市デザインの考え方に基づく個性ある都市空間の形成を目指すものです。国土交通省グリーンインフラ大賞特別優秀賞を頂くことが出来ました。

具体的な取組として、「いつでも誰でもくつろげる私の芝庭」をコンセプトに、千葉公園の野球場跡地を芝生で敷き詰めた空間に再生し、今年のゴールデンウィークにリニューアルオープンしました。千葉市では初めてとなるPARK-PFIを採用して、飲食や物販、BMXのパンプトラックが展開するほかアートやダンス等の子ども向け体験プログラムが「YohaSの寺子屋」として市内経済界の寄付により提供され、新たな学びと交流が創り出されています。

また、都川、花見川、鹿島川等の河川を地域資源としてとらえ、人々の営みと河川との良好なつながりを築き、地域活性化につなげていくために、「かわまちづくりビジョン」や「コンセプトブック」を策定し、「河川の魅力発信」を行っています。特に「都川」では、千葉のまちの形成に重要な役割を果たした水運の歴史を振り返る「ちばかわまつり」を開催して、千葉開府900年の機運醸成につなげています。また、「花見川」では、サイクリングコースを整備し、テラスを設置するほか、隣接の八千代市、佐倉市と連携して流域を「千葉うみさとライン」として魅力を感じられる取組を進めています。

さらに、資金調達の面でも使途を全額「水の循環」に関するブルー適格事業とするブルーボンドを令和5年12月に発行し、首都圏の自治体として、適切な下水道施設のインフラの整備で海洋汚染を防止し、持続可能な水資源管理の姿勢を投資家に示しました。8月にはグリーン事業・ソーシャル事業双方に資金を充当するサステナビリティボンドも発行しており、政令市として年二回のESG債発行は初めてで、その積極的な発行姿勢が評価されてサステナブルファイナンス大賞地域金融賞を受賞しました。

千葉市は令和8年に千葉開府900年を迎えます。千葉常重が現在の千葉市中央区亥鼻付近に居を構えたことを千葉のまちの歴史の始まりとしており、「千葉一族からの学びを活かし、未来へ向けたひとづくり、文化づくり」を基本理念として、本市の開祖である千葉一族の軌跡を改めて振り返り、得られた学びを共有するほか、市民とまちのより豊かな未来の実現に向けた記念事業の検討を進めています。先人が残した緑と水辺の環境を受け継ぎ、より暮らしやすい都市を形成していくべく、多様な主体がさまざまな側面からひとづくりと文化づくりにかかわることを通じて、より創造的で充実した暮らしとともに、中長期的な地域社会や社会経済活動の活性化につなげる取組を展開していきます。

水辺の観光まちづくり

水の特性を巧みに生かす
―地域資源の総合プロデュースを―



（株）KITABA相談役・内閣府地域活性化伝道師
● 大下 茂

多彩に変化する水辺の景

水辺ほど様相が変化する対象はない。鏡のごとく月を映し出す水面（みなも）ばかりではなく、北斎の代表作・神奈川沖浪裏（かながわおきなみうら）に描かれている景、とうとうと流れる大河を眺める水辺や歓声とともに急流を下る活動の景、古今東西の鑑賞対象としての滝、山間地に突然生まれたダム湖等、その活用を総論として論ずるには多彩すぎる。気象との関係で刻々と様相が変化するのも水の景の特徴である。

観光との関わりをみても、眺める、近づく、触れる、入る、流れに身をおくといった体験のみならず、港町や河岸、城下町の堀割等、地域の成り立ちは水辺が大きく関わりを持って今日に至っており、時間の流れをさかのぼって往時をイメージして地域を見たときに新たな光景が目の当たりに見え隠れすることもある。

本稿では、このような多彩な水辺の景の特性を踏まえた上で、水辺を生かした事例から観光まちづくりの推進を先導するに倣っておきたい考え方を論じたい。

「浜大漁に岡万作」をテーマに

千葉県九十九里町は、新全国総合開発計画では大規模レクリエーション基地が構想される等、海水浴場として著名な地域である。海水浴場としての歴史は長く、1910（明治43）年に片貝海水浴場に地元の向上会の手により無料休憩所も開設された。徳冨蘆花との交流や高村光太郎の妻・智恵子が療養する等、浜辺の特性を生かした通年型の地域活力向上に向けた戦略に早くから取り組んでいた。

九十九里浜一帯は平坦と思われるが海岸線に沿って微地形を有する地域であり、もとも

筆者プロフィール

大下 茂氏
（おおしも・しげる）

東京工業大学大学院博士課程修了。技術士（建設部門　都市及び地方計画）、博士（工学）。

1989年9月に㈱プランニングネットワークを設立後、2001年より東京工業大学工学部、立教大学観光学部兼任講師。2012年4月帝京大学経済学部観光経営学科教授、2024年3月に退任、現在に至る。2014年4月、内閣府の地域活性化伝道師に登録。専門領域は、『集客』・地域の視点での観光まちづくり（地域の記憶と市民協働）。（公財）利根川・荒川水源地対策基金評議員、東京都観光事業審議会会長、市町村の総合計画審議会会長等も兼務。

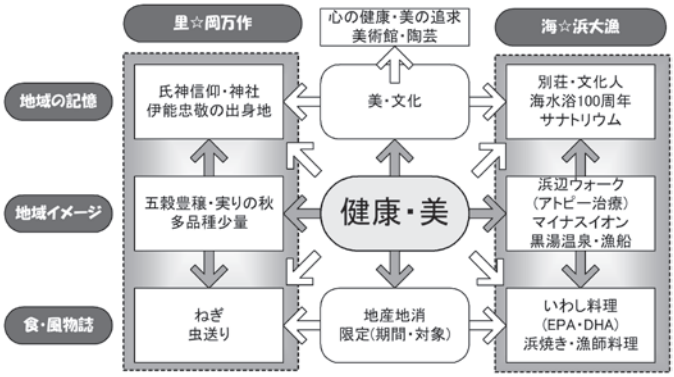


図　ワークショップで導かれた九十九里町の地域資源コンセプトマップ
出典：拙著「「集客まちづくり」の技術」、p70、学陽書房

とは内陸に農耕を主とする集落が形成（「親集落」と称している）され、その後、新田拡大のための「子集落」が海岸線と親集落の間に広がり、最後に海岸線沿いに漁のための集落（「孫集落」）へと展開されてきた。イワシが漁の主たる魚種で、江戸時代には干イワシ（干鰯）は高価な肥料として地域の特産品となっていた。地元ではイワシが大漁に水揚げされると、それを肥料とするため、内陸部（岡）の農耕は万作となることを称して「浜大漁に岡万作」とうたわれていたのである。

しかし近年の海水浴の人気の低迷から夏の観光入込み客数は漸減しつづけていた。地域活性化を目指す九十九里町と商工会は、浜だけでなく地域全体の地域資源を再度見直し、中心に「健康・美」を統一テーマとして据えることで、地域に長くうたわれてきた「浜大漁に岡万作」を地域が一体となってつなげることができる資源マップを作成（図参照）、地域内の伝統行事をはじめとし新しい文化活動を総合プロデュースした観光まちづくりの展開を模索することとした。地域の成り立ちにまでさかのぼって地域資源を再発見した取り組みは、他の地域も倣うことができる思考であると言えよう。

観光振興プランの重点戦略に

現在浅草からスカイツリーにかけての地域には多くの訪日外国人観光客が往来しており、隅田川に架かる吾妻橋上で写真撮影をしている観光客も多い。橋上や橋詰広場は、まち歩きを楽しんでいる観光客にとっては、連続するまち歩き体験の中で、変化するリズム感と開放感が得られる恰好の撮影スポットである。また、隅田川を行き来する水上バスは、乗船体験も楽しみであるが、河面に変化と動きを生み出す撮影対象の一つでもある。

２０２３年は、関東大震災から１００年を迎える年であった。関東大震災の復興と言えば、すぐに帝都復興院総裁として尽力した後藤新平氏を思い起こす。中でも、隅田川をパリのセーヌ川にたとえ、復興橋梁をさまざまな形状の橋として架けることで、復興後の首都としての高い格付けと都市文化度の確立、さらに現在で言う都市観光の推進をイメージしたのである。新しく架橋された９橋とは、下流から相生橋、永代橋、清洲橋、両国橋、蔵前橋、厩橋、駒形橋、吾妻橋、言問橋であり、現在も当時の形状のまま、観光客を迎えている。この１００年前の帝都復興・都市形成に対する熱い思いが、そぞろ歩きやリバークルーズを楽しんでいる訪日観光客にも伝われば、観光体験に格別の想い出や物語が加わることとなろう。

また、今年２０２４年は荒川放水路通水から１００年を迎える。現在の隅田川沿いのリバーウォークを安心・安全に楽しめるのも、この治水事業があってのことである。周年事業を迎えるにあたり、国土交通省関東地方整備局荒川下流河川事務所が音頭をとって、東京都と沿川２市７区による荒川放水路通水１００周年記念事業がスタートしている。この一つの自治体である北区は岩淵水門（青水門・赤水門）が観光対象となっている。花火大会を荒川河川敷で開催する等、地域にとって貴重な観光スポットとなっており、周年事業に対して大学生をはじめとする地域住民が加わり、参加型のさまざまなプログラムが企画・実践されている。興味深い取り組みではあるが、残念なことに観光客をはじめ沿川住民には情報があまり伝わっていない。

河川は、多くの場合、国や都道府県が管理していることが多く、非常時の治水管理の観点から河川利用の諸手続は煩雑であり、観光的活用のハードルが高いと思われがちである。加えて、地域にとっては、国・都道府県との馴染みも薄い。そこでその橋渡しとして期待されるのが地元自治体である。地方自治体では、独自に観光振興プランを策定していることが少なくない。隅田川沿川地域の墨田区では「墨田区観光振興プラン」の五つの基本戦略の一つに「水都すみだの再生」をうたい、隅田川（東京都管理）の積極的な観光活用に取り組んでいる。北区では「北区観光振興プラン２０２３」の重点戦略の一つに「水辺を活用した観光コンテンツの充実」を掲げ、特に荒川河川敷（国

管理）の活用を、公公連携・公民連携の下に進めることを明記している。

観光客等にとって自治体と河川管理者との関係、所掌業務の分担は関係ない。利用者目線で地域関係者が一体となった取り組みの第一歩は、マスタープランとなる観光振興の計画に重点的に取り組む旨を明記し、位置づけを与えることから始められるのではないだろうか。

舟運を現在に再現

かつて多くの旅人の移動手段は河川を使った舟運であった。旅の自由化が実現するのは江戸中期以降であり、江戸を拠点とした庶民向けの行楽地として成田詣がブーム化した。2泊3日の行程が一般的であるが、時間的・金銭的に余力のある旅人は、木下河岸から利根川を下り、東国三社詣を楽しんだ。東国三社とは、古い歴史を有する香取神宮（千葉県香取市佐原）、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）、息栖（いきす）神社（同神栖市）の三社であり、近年ではパワースポットとして脚光をあびている。

利根川下流の右岸に位置する千葉県香取市佐原と、左岸の茨城県潮来市・鹿嶋市の三市が県境を越えて水郷三都観光推進協議会を設立したのは2005年であった。古くから水郷地帯と称されていたことを縁に連携を仕掛けたのである。仕掛け人であった佐原は、江戸時代中後期には、利根川舟運の河岸（川港）として「江戸優り」と言われる程の活況を得ていたものの地域活力の低下が顕著にみられ、舟運として利用されていた小野川、古い町並み、夏と秋の山車行事は、地域では「三悪」と呼ばれていた。佐原商工会議所の当時の会頭・小森孝一氏は、「ないものを嘆かずあるものに磨きをかけるまちづくり」をかけ声に、小野川の再生のための清掃活動と舟運の復活を試み、集客を実現したのである。水郷三都観光推進協議会の設立後は、成田空港との近接性を生かし、緒についたばかりの訪日外国人観光客誘致として、韓国、台湾、香港、オーストラリアなどの旅行社やメディアの誘致に加え、そのコンテンツの一つとして東国三社詣をイベントとして復活させたのである。

城下町は水活用アイデアの宝庫

城下町の造営においては、水は防御機能に加えて市中に生活用水を回すことの意味合いが大きかった。小藩ではあるが、織田信長の二男・信雄が宗家として形成した小幡藩（群馬県甘楽町）では、一級河川雄川から引き込んだ「大堰」と、この堰から取水し陣屋内に回されている「小堰」から成る「雄川堰」が水網のように張り巡らされている城をもたない特徴的な城下町である。雄川堰は、現在も地元住民が愛着と誇りをもって継承・管理しており、藩政時代からの姿を残している。観光地としての知名度はそれほど高くはないものの、雄川堰は「日本名水百選（環境庁＝当時）」「水の郷百選（国土庁＝同）」「水百選（農林水産省）」の認定や「土木学会選奨土木遺産」に選定されている。本物を追求している甘楽町や地域住民にとって雄川堰そのものが地域の自慢であり、文献史料に基づいた復元を加えた歴史風致の地域として、文化度を感じてほしい観光客を迎える観光まちづくりを志向して取り組んでいる。

国宝・松本城を有する松本市では、登城する観



再生された小野川舟運（千葉県香取市佐原）



市中に張り巡らされている雄川堰は地元自治体により日常的な管理がされている（群馬県甘楽町）

光客に対して、新たな観光体験の情報を発信している。その一つが湧水である。松本市街地中心部には、場所によっては都心のコンビニよりも高い密度で湧水が存在する程である。その理由は、盆地ならではの地形にあり、松本市街を囲んでいる山々と、そこから流れてくる川からもたらされる豊富な水量が源となっている。水質についても「平成の名水百選（環境省）」に選定されるとともに、「名水百選選抜総選挙」においては名水部門第3位（平成27年度）と観光地としては素晴らしい実績を残している。

松本市等では、水をテーマに歴史や町並みを歩いて楽しめるように、①水の生まれる町（所要時間約35分）②時代とともに守られた水（同約30分）③お堀の水をたどる（同約20分）の三つのショートコースで19の湧水を紹介した「まつもと水巡り」マップを作成し、まち歩きを推奨している。コース上には、酒蔵や和菓子等、名水の存在が背景にあることを感じさせる特産品とも巡りあえる。食との出会いも、観光地にありがちな観光客をターゲットとするものではなく、地元住民の日々の暮らしと直結していることから、観光地としての品格をも感じられる。

多様な体験プログラムの総合化を

本稿では、多様な水の特性を生かした観光まちづくりの先行事例の中で筆者が観光まちづくりに関わりを持たせていただいた一部の地域の事例からの学びを紹介した。

全国の多くの地域では、観光を通じた地方活性化が模索されており、観光客誘致に向けて競合しつつある。話題性のために奇をてらった取り組みもみられるが、それは長続きしない。水辺の活用を考えるにあたっては、むしろ、地域の成り立ちや履歴・暮らしぶりに学び、来訪者が希求しているものに近づくよう水のもつ多様な姿を総合化したプロデュースが求められる。地域資源の再認識・再発見にあたっては、風土・暮らしぶりを再認識すること、歴史・史実から発見すること、喪失したものを再認識すること、マイナス資源だと思っていたものをプラス志向で活用すること等から活用する地域資源に地域における意味合いを与え、それらを生かした個々の体験プログラムを「水」をテーマに総合化・パッケージ化することで、その地域にしかない新しい地域商品として創出・売り出すことができる。また、個々のアイデアの発意・発想は、地元の子どもたちや若者から募ることにより意外性のあるアイデアが生み出されることもある。地元自治体や観光関連団体、商工会議所や商工会等が全体をコーディネートすること、関係機関との調整役を担うことでひとつのアイデアが新たな地域商品・体験プログラムとして誕生するのである。

「持続可能な観光まちづくり」は、もはや定番のうたい文句となっている。本稿のテーマである「水」は器によって形を変える。水辺の観光まちづくりを進めようとする地域の足元には、観光まちづくりの源泉となる地域の成り立ちや地域が歩んできた履歴・地域の記憶とともに、次の出番を待っている脈々とした水が流れている。水辺を生かした観光まちづくりを進めるには、水の脈を受け止める器が、いま求められているのではないだろうか。地域の器の形に応じて、観光まちづくりに取り組む形態はさまざまであり、正解はないのかもしれない。地域の活力の源を受け入れる器づくりにこそ、まさに地域の個性が映し出されるのである。また、地域に流れる脈を手繰り寄せることで生まれる広域との連携への展開にも期待を寄せたい。

水辺を生かした観光まちづくりの新たな取り組みと持続的な展開に期待するとともに、見守っていきたい。

【参考資料】
○九十九里町（２０１０年８月）『九十九里新創世記―片貝海水浴場無料休憩所１００周年記念誌』
https://www.town.kujukuri.chiba.jp/cmsfiles/contents/0000000/420/100.pdf
○大下茂（２０１７年３月）『隅田川の記憶を読む～移り変わる風情に時の思いを重ねる』、すみだ地域学セミナー10周年記念誌（墨田区教育委員会）
○大下茂（２０１１年２月）『行ってみたい！と思わせる「集客まちづくり」の技術』学陽書房
○墨田区（２０１５年４月）『墨田区観光振興プラン』
https://www.city.sumida.lg.jp/kuseijoho/sumida_kihon/ku_kakusyukeikaku/kannkousinnkoupurann.files/sumidakuhonnpenn.pdf
○北区（２０２３年３月）『北区観光振興プラン２０２３』
https://www.city.kita.tokyo.jp/sangyoshinko/bunka/kanko/kanko/kankoshinkoplan2023.html
○甘楽町（２０１３年３月）『織田宗家ゆかりの歴史的水路雄川堰・小堰』
○松本市・松本観光コンベンション協会・新まつもと物語プロジェクト（２０２３年）『まつもとみず巡り』
https://visitmatsumoto.com/wp-content/uploads/2018/11/mizumeguri_map2023.pdf

shig-osm@blue.ocn.ne.jp

水辺の観光まちづくり

小野川の流れにこころ癒やされて
―佐原おかみさん会と「まちぐるみ博物館」―

佐原おかみさん会
（千葉県香取市）



佐原おかみさん会会長 ● 平塚 智子

◆◆◆ 小野川とわたし

千葉県佐原に嫁いではや35年。最近では、地域の方に「おたくは婿取りですか」と言われるくらいずうずうしくなじんでいる。嫁いだ先は、創業文化元年（１８０４年）の由緒ある福新呉服店。埼玉県で生まれ商家に縁がない私にとって、古風な地域の老舗暮らしは、なかなかどうして大変だった。

佐原は千葉県の北東に位置し、銚子と成田のちょうど真ん中あたりにある商人の町である。「小江戸」「江戸優（まさ）り」とも言われており、歴史的な町並みのあるところだ。町の中心に小野川が流れ、少し歩くと利根川、付近には国指定重要文化財の香取神宮や観福寺（日本厄除三大師）があり、最近はロケ地としても知られている。かつては水運を利用し、佐原の米、酒、醤油などを江戸へ運び、帰りに江戸の商品を積んで戻ってきたことで栄えたという。

小野川は昔、ふたをして駐車場にする計画もあったと聞いているが、今はすっかり町のシンボルとなり、両岸に植えられた柳を見ながらさっぱ舟に乗る遊覧船の風景がよく知られている。この川の良さは蛇行していて川幅が狭いところ。風を感じながら舟から眺める町の姿も風情がある。

子どもが小さな頃は手をつないで川沿いを歩き、幼稚園までの行き帰りを過ごしていた。初夏には柳に花が咲き、若草色の葉がそよぐ風景は歩いているだけでも心が和んでいく。

◆◆◆ おかみさん会の成り立ち

この町は昔から祭りが盛んで旦那衆中心に物事が決まってきた。そこで発生した「佐原おかみさん会」はちょっと異質だったと思う。立ち上げこそ、観光課からの呼びかけによる「佐原まちぐるみ博物館」を行う補助金事業だったが、終了後は自主的に活動し19年続いてきた。もともと、水運で栄えた佐原は、時代の変化に取り残され、大型の商業施設には太刀打ちできず商店会も以前のように活動していない。「この町を何とかしないといけない」という思いはそれぞれのおかみにあった。しかし、何をしたらよいのかわからない。そこに補助金事業により毎月勉強会があり、横のつながりができた。１年の事業が終わっても続けていこうと若手３人が協力して代表を務めることになった。そして、自主的に集まり、アイデアを出し合い、活動を重ねてきた。その中で守ってきたことがある。それは、「季節感を大切にし、佐原の良さを壊さないこと」だ。

私たちは、店の女主人と趣旨に賛同する女性20人ほどで活動している。また、賛助会員として地域の約30カ所の店舗が参加。主な活動は「佐原まちぐるみ博物館」の運営とにぎわい創出イベントの開催である。

佐原まちぐるみ博物館とはそれぞれの商家にあ



おかみさん会の会員による作業風景

るお宝（先祖代々の道具類や建物、手製の作品、たたずまいなど自慢できるもの）を店内に置き、お客様と会話を楽しむという試みだ。佐原の町全体が博物館である。企画展としてお雛様や五月人形を展示する。そこにいるおかみはお客様に楽しんでいただく「学芸員」ならぬ「楽芸員」である。

◆◆◆ 小野川を活用した活動内容

年間活動は、新春の「佐原・町並み・お正月」と「寿獅子舞」から始まる。小野川周辺をお獅子一行が厄を吸い取りながら練り歩く。

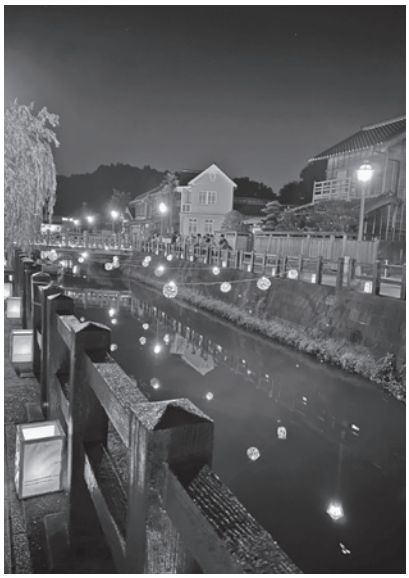
2、3月の「さわら雛めぐり」は各家に伝わるお雛さまを100組以上展示する。協力店舗だけでなく、だし（川へ降りる階段）にお雛様の家を設置して舟からも楽しめる。「さわら雛舟」では、香取神宮の雅楽の演奏で舟を七段飾りのお雛様に見立て本物の十二単のお雛様や稚児さんが乗り優雅に運行する。毎年、稚児さんの希望者が増え、最近では抽選となるほどの人気ぶりだ。

4、5月は「五月人形めぐり」。6月は地元女子高校の茶道部のご協力で、佐原のお菓子とお抹茶を小野川の風景とともにおかみの琴の演奏を聞きながら五感で楽しんでいただく「めぐり茶屋（野点）」。


小野川を進むさわら雛舟（３月）

8月の「さわら・町並み・夕涼み」は、ゆかたで楽しむ灯りと音というテーマで行い、今年20回目となる。活動を始めたころ、1日の仕事を終え、夜な夜な集まって相談を重ねていた。会員の店に行く際、小野川沿いを通り「こんなに素敵なのに人がいない。どうしたら夜の佐原に人が来るようになるだろう」そんな思いからこのイベントがはじまった。佐原の魅力をもっと知ってもらうには…。何をすればお客様に喜んでもらえるか…。そうして私たちはさまざまな挑戦をしていった。

約600本のガラス瓶にろうそくを入れ、色紙で巻き小野川沿いに設置したり、大きな竹灯りを護岸に設置し水面に映したり、竹の毬に灯りを入れ小野川に吊るしたりとライトアップにも工夫を凝らした。メインイベントの「夢灯ろう流し」は、舟から願いごとを書いた灯ろうを自分で流すことができる。スタッフも浴衣を着て参加し、小野川をステージとし、佐原囃子、三味線、弦楽四重奏、篠笛などの演奏も行った。

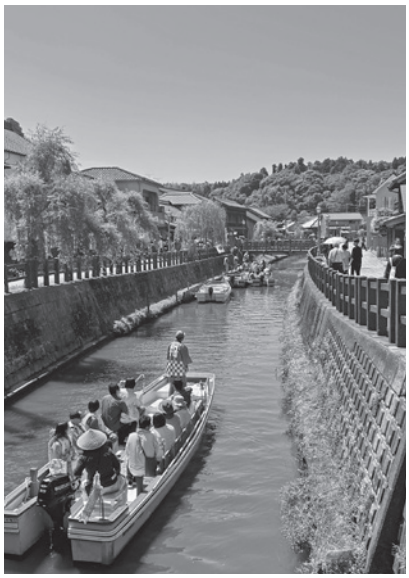

さわら・町並み・夕涼み（８月）

◆◆◆ 今後の活動と想い

佐原おかみさん会の会員は20人程度だが、中心で運営しているのは数人、その時により参加できる会員と地域の皆さまたちが活動を支える。改めて一緒に活動してくれた協力団体、おじさまや若者たち、おかみたちとその仲間に感謝。それも、同じ思いの同志がいたからできたこと。これからはこの活動を次世代へ引き継いでいただく予定だ。地域に生まれ育った子どもたちがイベントに参加し、小野川のすてきな風景を目に焼き付けてもらい、また戻ってきてくれることも願っている。

そして、今後も町にいらしていただいたお客さまに楽しい旅の思い出を少しでも感じていただけるよう自分の店を守りつつ心からおもてなしをしていこうと考えている。

さあ、あなたも佐原で時を巻き戻して癒やしのひとときを感じてみませんか。


小野川の風景

水辺の観光まちづくり

さめうらダム湖から広がるまちづくり
―スポーツ×観光×地域振興―

一般社団法人
土佐町スポーツコミッション
（高知県土佐町）



一般社団法人土佐町スポーツコミッション
専務理事 事務局長
● 古賀 智志

◆◆◆ 四国の水がめ 西日本最大規模の早明浦ダム

四国のほぼ真ん中に位置する高知県土佐町は「四国の水がめ」として知られる西日本で最大規模の早明浦（さめうら）ダムを有しています。１９７３年のダム完成以降、四国４県に分水され多くの人々の暮らしや産業を支えてきました。そのダム湖である「さめうら湖」の周辺では、近年、より多くの人々に湖とその周辺の雄大な自然を体験してもらおうとスポーツ・アウトドアアクティビティの取り組みが活発に進められています。ここでは、土佐町と私たち土佐町スポーツコミッションが展開するさめうら湖から広がる町づくりについてお伝えします。

人口約３５００人の土佐町は、全国の中山間地域と同様に人口減少や過疎化、高齢化などの課題を抱えながらも、毎年多くの人が移住しさまざまな活動を展開しています。そのような中、ながらく地域にとって近くて遠い存在だったさめうら湖を地域の独自資産、貴重な観光資源として活用しようという機運が高まり、２０１８年さめうら湖周辺整備基本計画がとりまとめられ今に至る取り組みが本格スタートしました。とはいえ、治水と利水が本来の役割であるダム湖の多目的利用にはさまざまなハードルがありました。土佐町をはじめ近隣自治体、消防署や警察署など地元のさまざまな組織、湖面を管理する独立行政法人水資源機構、ダムそのものの管理者である国土交通省など、あらゆる皆さんの努力で今の私たちの活動が支えられています。

◆◆◆ 湖水上のレジャーとスポーツ カヌーやSUPを楽しめるまち

さめうら湖は、その規模と周辺環境の特性から広大かつ静かで穏やかな湖面がひろがっていることが最大の特徴です。土佐町は当時、基本整備計画を進めるにあたり、そのメリットを最大限享受できるものとしてカヌーに着目し、競技スポーツとレジャーの両面での事業に挑戦します。

日本カヌー連盟の協力のもと、カヌー競技で元世界選手権金メダリストであるハンガリー出身のジョコシュ・ラヨシュ氏を指導者として招聘（しょうへい）、地域の小学生から高校生までを指導する「さめうらカヌーアカデミー」というクラブチームを立ち上げました。現在では、インターハイで上位成績を収めるジュニアＴＯＰレベルの選手が育つなど、着実に成果をあげています。

また、地域内外のより幅広い人々を対象にしたツーリズムとしては、湖のガイドツアーを柱に据えました。「雄大で美しい湖とそこから広がる風景、自然と一体化して家族や仲間とリラックスしながら安心してアクティビティを楽しめる場所」というキャッチコピーのもと、年間１０００人規模の人々がレジャーカヌーやＳＵＰを体験しています。



地域のカヌー競技クラブ「さめうらカヌーアカデミー」

3施設を融合させた「湖の駅さめうらレイクタウン」

本整備基本計画の特徴は、三つの隣接した施設を融合し独自の価値を提供する「湖の駅さめうらレイクタウン」として全体をデザインしたことです。計画の核となるその三つの施設を順番にご紹介してまいりましょう。

一つ目は、かつて研修合宿などを中心に受け入れていた「土佐町青少年等の家 さめうら荘」をリニューアルした「さめうら荘レイクサイドホテル」です。２０１８年12月オープン、「窓のむこうには、さめうら湖」のタイトル通り全室レイクビューとなっており、広大な湖面を望むことができます。また、屋外テラス付きのガラス張りレストランでは、土佐町が誇る土佐あかうしのステーキや早明浦ダムを模したダムカレーなど、地元食材を使用したメニューが人気を博しています。

二つ目はスポーツと観光さらには地域住民の活用も包含したユニークな施設、さめうらカヌーテラスです。２０２０年9月竣工、施設内には冬でも競技カヌーのトレーニングができるハンガリー式パドルプール、アスリートや地域住民のためのトレーニングジム、レジャーカヌーやSUP体験、サイクリングなどで立ち寄った観光客や地域の人々がゆったりとくつろげるカフェなどを併設しており、年間1万数千人が訪れています。

三つ目が地域に長年愛されてきた「さめうら森林公園」をリニューアルした「さめうらテントパーク」です。２０２２年4月にトライアルオープン、同年7月に本格稼働し年間１０００人を超えるキャンパーが訪れます。今後数年で段階的な拡充工事が控えており、さらに多くのお客様に満足していただけるよう準備をすすめているところです。



さめうら湖みずうみ開きイベントでのカヌー体験（2024年４月）



さめうらカヌーテラス



さめうらテントパークからの眺め

土佐町スポーツコミッション その役割と新たな挑戦

私たち土佐町スポーツコミッションは、土佐町が手掛けたこれらの取り組みを効果的・効率的に運営し持続的に発展させていく目的で２０２１年4月に設立されました。具体的には、湖の駅の中の「さめうらカヌーテラス」と「さめうらテントパーク」の二つの施設の指定管理を中核財源に関連事業を推進しています。

土佐町は２０２３年10月にスポーツと健康を通じたまちづくりをテーマにしたスポーツ庁の企画である「スポまち！長官賞２０２３」を高知県で初めて受賞しました。湖の駅さめうらレイクタウンを核とした内容で、土佐町スポーツコミッションはその推進役を担います。２０２４年4月からスタートした2年間のプロジェクトの主な目標は、①さめうら湖を競技カヌー振興の全国的拠点として確立②スポーツ・アウトドアツーリズムの包括事業化③多くの地域住民に貢献するスポーツウェルネス事業の立ち上げ―の三つです。設立から3年、草創期の課題を乗り越え地域の期待に応えられるよう、これらの目標に果敢に取り組んでまいります。是非、土佐町にお越し下さい。お待ちしています。

水辺の観光まちづくり

文化、環境、防災から見た現状と展望
―観光まちづくりの好事例から考える―



公益社団法人日本観光振興協会
総合調査研究所副所長
● 安本　達式

観光と水との関わりは幅広く、名瀑（めいばく）や雄大な川の流れ、街中を流れる用水路、夕日の沈む海など、水辺の景観を楽しむものもあれば、カヌー、ラフティング、釣り、スキューバーダイビングなど水上や海中のアクティビティもあります。また、名水や地酒、銘茶、魚介類などの飲食、特産品としての関わりもあります。一方で、持続可能な地域づくりに向けては、水およびその環境を観光として活用するとともに保全・保護しなければならないし、津波や豪雨などによる災害に強い観光まちづくりを進めていかなければなりません。

以下、水辺の観光まちづくりの取り組みの現状について、まず文化、環境、防災の三つの観点から、観光と水との関わりや関連する地域の取り組み事例を整理し、今後の課題と展望をまとめます。取り組み事例は、令和4年度に日本観光振興協会で実施した「海事観光の総合的プロモーション事業に関するSDGsを踏まえた海事観光の事例調査」（注1）（以下「海事観光事例調査」）と平成19年より計16回実施してきた産業観光まちづくり大賞（注2）の受賞地（以下「大賞受賞地」）の取り組みから紹介します。

文化からみた水と観光

平成11年度、国土庁（現国土交通省）がまとめた「水文化の保存再生を通じた水源地域の活性化方策（指針）」において、「水文化とは人々が、水を上手に活用し、また水を制する中、長い時間をかけ、生み出されてきた有形、無形の文化や伝統です。各地域はそれぞれ、個性的な水文化を持っています。水文化には祭事や信仰、伝統工芸、水車や堰等の施設などがあげられますが、それに加え、水を中心とした生活パターンや生活様式も水文化ととらえます。」とあります。まさに、水文化は、地域を見つめることで地域らしさを発見することから始まる観光まちづくりにおいて、重要な観光資源となります。水は循環しており、その過程でさまざまな水文化が生まれ、それらを生かすことにより地域固有の観光資源や体験が生まれます。地域の水文化を見つめなおすことは、地域固有の観光価値を発見することにつながります。

第12回大賞受賞地「海女（あま）小屋はちまんかまど」（株式会社兵吉屋・三重県鳥羽市）は、3000年前から行われてきたといわれている海女の文化を伝える観光体験で、三重への旅の目的となるまでに成長しています。平成16年に、実際に使用している海女小屋を日本で初めて開放し、現役の海女さんが米国のお客様を自分たちの獲ってきた海の幸や手作りのお米などでもてなしたことがきっかけとなり、「海女小屋はちまんかまど」での体験サービスが始まりました。新鮮な魚介を提供するとともに、海女の生活や命がけの素潜りでの漁法、漁獲対象とする資源を「獲りすぎないよう」「獲り尽くさないよう」に守り続けていることなどの海女文化を海女さん自らが語る〝本物〟の体験となっています。伊勢志摩は、日本で最も多くの海女が存在する地域であり、「海女小屋はちまんかまど」の事業モデルは、その話題性から、多くの海女小屋で同様の体験サービスが始められ、旅行会社や周辺ホテルなどによる旅行商品化も進み、現在では三重への誘客の柱の一つとなっています。

また、鳥羽市、鳥羽市観光協会、鳥羽磯部漁協による「鳥羽市・漁業と観光の連携促進事業（漁観連携）」や鳥羽市観光協会による「海女さん応援企画プラン～海女さんと出会う旅～」事業が実施されるなど、海女の後継者育成や海女文化の維持に関する活動へとつながっています。鳥羽市では、海女、海の水文化に着目し、それに関わる地域の漁業と観光業が連携することで、地域固有の

観光価値を高める観光まちづくりが展開されています。


海女小屋はちまんかまど「海女着体験（ロシアからのお客様）」

環境からみた水と観光

ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）において、海洋資源に関する目標14は、観光の役割が明記されたターゲットの一つであり、水辺の環境に対する観光の貢献が求められています。また令和元年に観光庁が定めた「日本版持続可能な観光ガイドライン（ＪＳＴＳ－Ｄ）」においては、大カテゴリーの一つ「Ｄ環境のサステイナビリティ」の中の資源マネジメントにおいて、「水資源の管理」「水質」「排水」の三つの水に関する指標が定められています。観光と環境は、切っても切り離せない関係にあり、その中でも水は観光と環境において重要な役割を担っています。

第15回大賞受賞地であり、海事観光事例調査を行った一般社団法人備前観光協会・一般社団法人みんなでびぜん（岡山県備前市）では、海洋教育を通じたＳＤＧｓと観光－里海・里山の自然と共存する観光まちづくりが進められています。「みんなでびぜん」の活動のルーツは昭和60年ごろから日生町の漁師たちが取り組んだ「アマモ場再生活動」にあります。漁獲量の減少が、魚の産卵の場であり稚魚の住処であるアマモ場の減少によるものと気づき、日生漁業協同組合が自主的にアマモ場の再生を開始しました。漁師の高齢化などで人手不足に陥ってからは、地元の中学生が「海洋学習」「環境学習」としてアマモ場再生に取り組むことなどで活動を支え、現在では、漁協、農協、商工団体、観光団体、企業、まちづくり団体、自治会、ＮＰＯ、小・中・高・大学生などのさまざまな団体でその目的を共有した地域全体での取り組みとなっています。

また、「みんなでびぜん」では、日本財団が推進する渚（なぎさ）の交番プロジェクトのもと日生諸島の頭島に令和３年９月にオープンした「ひなせうみラボ」の運営を行っています。「ひなせうみラボ」のコンセプトは「子供たちを海へ」であり、地元の食材を使ったレストランや土産店が入るだけでなく、海洋教育・海洋研究も実施しており、アマモ場の見学や種まき体験、海ごみを利用してハーバリウムを作るアートクラフトなど、多様な体験プログラムを提供しています。主に次世代を担う子供たちを対象に、観光を通じて海に対する関心や好奇心を高める取り組みであり、ＳＤＧｓの目標14「海の豊かさを守ろう」にある、観光開発が破壊されやすい海洋生態系の保全保護を進め、ブルー・エコノミー（環境を損なわない海洋経済）を促進する手段となっているといえます。

防災からみた水と観光

島国である我が国は、水に恵まれ、個性ある水文化を培ってきた半面、地震による津波や豪雨による河川氾濫・土砂崩れなどの水に関わる災害も多く発生し、地域社会および観光地に甚大なる被害をもたらしています。今後、観光による交流人口の拡大・地域活性化に期待が寄せられる我が国においては、一方で、観光客にとっても安心・安全な災害に強い観光まちづくりも求められています。水害から復活した、あるいは克服し、水と共存している地域の知恵を伝承していくことも観光の役割の一つとなります。

海事観光事例調査を行ったＮＰＯ法人体験村・たのはたネットワーク（岩手県田野畑村）では、平成23年の東日本大震災以降、被災体験を風化させず伝えていくために住民自らが体験談を話す「大津波語り部」を始めています。田野畑村は三

陸海岸を代表する景勝地「北山崎」を中心に、通過型から滞在型の観光を目指し「番屋エコツーリズム」をコンセプトとした体験プログラムの開発やガイド人材の育成を行ってきました。ＮＰＯ法人体験村・たのはたネットワークの前身である「たのはた農村漁村体験推進協議会」が平成16年に設立され、サッパ船と呼ばれる小型漁船で北山崎の岩穴を潜り抜けて、奇岩や断崖絶壁を真下から仰ぎ見る「サッパ船アドベンチャーズ」を実施し、震災前の平成22年には約５０００人の乗船を記録しています。大震災では、サッパ船や机浜番屋群が流失するなど大きな被害を受け、サッパ船体験は中止を余儀なくされましたが、人的被害が少なかったこともあり漁師達はいち早く再開に動き、平成23年7月29日には「サッパ船アドベンチャーズ」を再開しています。



みんなでびぜん「アートクラフト」



体験村・たのはたネットワーク「サッパ船アドベンチャーズ」

「大津波語り部」は大震災をきっかけに始められたものですが、大震災以前も昭和８年の津波体験者がその経験を語る「津波語り部」のプログラムが行われていました。大震災での被害が比較的少なかったのは、「過去の津波被害の高さに石碑をたて、これより下に住むな」という先人の教えを忠実に守ってきたからと言われており、また、それを「津波語り部」として語り継いできたことによるといえます。大震災以降は、今度は大震災の経験を風化させず後世に語り継ぐ活動として、体験観光のプログラム「大津波語り部＆ガイド」（現在は「大津波語り部」に名称変更）が始まりました。もともと北山崎を中心とする観光地であり、観光収入が地域経済の一役を担っていた田野畑村にとっては、「大津波語り部」が観光客の受け入れの復活と地域経済の活性化につながっています。さらには観光客にとって安全・安心で災害に強い観光まちづくりに寄与するものとなっているといえます。

まとめ

文化、環境、防災の3点から水と観光の関わりとその取り組み事例を紹介しましたが、各地域の取り組みは、もちろん単独の観点に特化したものではなく、複合的な取り組みであり、複合的な価値を観光客が認めることにより実際に来訪する観光地となります。今後の課題・展望として、水辺の観光まちづくりに求められることについて、以下の3点にまとめます。

①地域の生活、産業に根付いた本物を提供するための場づくり

今回取り上げた取り組み事例は、いずれも海に関係するものですが、すべてに漁師、漁業が関わっています。海女小屋、アマモ場の再生、サッパ船のそれぞれの体験は、ともに漁師の生活、生業にもとづいた本物の体験となっています。また本物を提供するために、観光業と漁業が協議する場

の設置や目的の共有が図られ、継続した取り組みとなっていることも共通しています。まずは、地域の観光協会やＤＭＯなどが間に立ち、関係者の議論の場をつくることが求められます。

②地域の合意形成にむけたデータ収集・分析・共有

観光地単位で指標に基づく観光地経営の活動を行うネットワークである「持続可能な観光地づくり国際ネットワーク（ＩＮＳＴＯ）」では、「計測できないものは、改善できない」という思想で、



日本観光振興デジタルプラットフォーム TOP ページ（https://lp.nihon-kankou-dx.info/）

エビデンス・ベースの政策形成を実現することが目的として掲げられています。水辺の観光地においては、観光が水の環境にどのような影響をもたらすのか、前述のＪＳＴＳ－Ｄの水に関する三つの指標のモニタリングが求められますが、その前段としての観光客数や消費額をタイムリーに取得できていないことやデータを収集しても分析にまで至っていないことが、多くの観光地で課題となっています。

現在、都道府県等にて、観光に関連するデータを取得・活用できるＤＭＰ（Data Management Platform）の構築が進められており、日本観光振興協会においても「日本観光振興デジタルプラットフォーム」を構築しています。これらＤＭＰを利用することで今までよりも容易に観光関連データを取得することが可能となります。データ分析に注力できる環境が整ってきており、分析した日々のマーケティングデータや観光による地域経済への効果、地域環境への影響などを関連する組織間で共有することで、地場産業や地域住民との合意形成を進めていくことが求められます。

③短期と中長期の視点からの役割分担

観光庁のＤＭＯ形成・確立の手引きには、ＫＰＩを設定し、ＰＤＣＡサイクルを確立することの必要性が説かれていますが、観光まちづくりにおいては、時間軸の違う二つのサイクルを回していく必要があると考えます。一つは観光マーケティング・マネジメントにおける日々刻々と変化する観光ニーズへ対応する短期的なサイクルであり、もう一つはまちづくりにおける将来のあるべき姿を見据えた中長期的なサイクルです。ＤＭＰなどから常にデータを取得し、マーケットや環境に変化があった場合には、それに応じた施策を即座に打っていく必要がある一方で、５年、10年後にどのような観光地としていくのか、その目標や方針、施策をまとめた観光計画を作成し観光まちづくりを進めていく必要があります。しかし、この二つのサイクルを混同している、あるいはどちらかに偏重している観光地も多くみられます。

例えば、自治体の観光課で観光計画を定め、それに基づいて、観光協会・ＤＭＯなどが日々のマーケティングによる観光事業を進めていくといった役割分担を明確にして観光まちづくりを進めていくことが求められます。そうすることで一過性の取り組みに終わらない計画性・継続性のある観光まちづくりを進めることができます。水辺の観光まちづくりにおいては、文化、環境、防災の行政担当や関連団体とも連携した計画策定と事業実施が求められるといえます。

注１　海洋環境の改善においても観光のチカラを活用し、海事観光を持続可能な観光に変革していくための方策を検討することを目的に、韓国の済州島を含む10地域の関係者等にヒアリング調査を実施。

注２　「産業観光（産業遺産や、現在稼働している工場・工房などを活用した観光）」による観光まちづくりを実践し、他の地域の模範となる優れた事例を表彰する制度で、平成19年度に創設され、令和５年度まで実施。

2023年度地方創生フォーラム in 東京

AI×地方創生
―自治体業務におけるAI活用―

地域活性化センターでは、全国の地域づくりに関心のある方々に地域活性化に資する事例や考え方を紹介し、今後の活動の参考にしてもらうため「地方創生フォーラム」を開催している。2023年度5回目となる地方創生フォーラムは、「AI×地方創生」をテーマに、2024年2月22日（木）に開催。ホテルルポール麹町の会場とYouTubeLiveによる配信のハイブリッド形式で行い、現地83人、オンライン129人の計212人が参加した。

広がるAI活用とその影響

基調講演①

はじめに、東武トップツアーズ株式会社CDOの村井宗明氏が「全国地方公共団体の生成AI活用の状況と、その実践体験」の演題で基調講演を行った。村井氏は、30歳から衆議院議員を3期務めたのち、行政専門ITエンジニアとして活躍しており、全国222の地方公共団体に月約3万回利用される公務員専用ChatGPT「マサルくん」（以下「マサルくん」）の開発者でもある。村井氏は、全国の地方公共団体や民間企業でAIの利用が急速に拡大している実態やその影響について次のように述べた。

AI産業の成長率は年平均53％と予測されており、現時点でもAIを使いこなす人とそうでない人には格差が現れている。米国のAI関連職の平均年収は約2140万円と高い水準にある一方、AIの発展により雇用が不安定になる人も約49％に上る見込みだという。労働市場は二極化が進むとし、この二極化は、人々の評価基準にも大きな影響を与え、AIを使いこなすことが出来るかどうかが重要な評価要素になっていくとの見通しを示した。

ChatGPTは、高度なAI技術によって人間のように自然な会話ができるAIチャットサービスであるが、ChatGPTの利用に際しては著作権に関する問題がしばしば言及される。ChatGPTは既存の文章、情報を参照して文章を作成するため、利用者が気づかないうちに著作権を侵害することがある。しかし、「マサルくん」等の公務員専用のAIは、必要に応じてインターネット上からの情報をシャットアウトするなどセキュア（安全）な環境で利用され、著作権違反のリスクを回避できるという利点がある。また、文章作成の引用元についても表示されることから正確性も担保されており、地方公共団体におけるAI活用は広がりを見せている。地方公共団体ではAI活用セミナーが開かれ、行政デジタル化が推進される一方で、AIを使いこなせない人々の支援も急務となっている。このような状況の中、公務員のスキル向上や業務改革が不可欠であり、AIの利用が進む中で、社会全体がより効率的に運営されることが期待されている。

自治体業務での活用の実際

AI、ChatGPTの特徴の一つとして、既存のデータ活用に優れているという点が挙げられる。地方公共団体での活用を例に挙げると、議会答弁書案作成の際に、過去の答弁を全て学習させたうえで答弁書案を作成させると、過去の答弁に沿った矛盾のない案を短時間で作成することができる。その際に、ネット上の情報をシャットアウトしたセキュアな環境で作業させることにより著作権を侵害することもなくなる。

もう一つの特徴として、決められた様式に沿った文書作成も得意である。事業の構想を短い文章で入力するだけで、様式に沿った申請書案を短時間で作成でき、村井氏はデジタル田園都市国家構想交付金申請書作



挨拶する地域活性化センターの林﨑理 理事長

成を例に実演してみせた。この申請書案は過去に同交付金が交付された優良事例の申請書を参照して作成されており、職員が一から作成するよりもはるかに効率的に優れた申請書のたたき台ができる。

ただし、過去のデータを参照することが前提のＡＩ、ChatGPTは、過去の事例にないものは作り出せないという限界がある。村井氏は、新しいことは人にしか作り出せないことを強調した上で、今後の業務改革はＡＩを業務効率化に活用したうえで、住民や顧客のサービス向上のための新しい事業創出に取り組むことが重要であると述べた。



基調講演を行う村井氏

ＡＩで地域の魅力向上、課題解決

基調講演②

続いて、ソフトバンク株式会社ＩＴ統括ＡＩ戦略室ＡＩ＆データ事業推進統括部ＡＩプロジェクト推進部Ａｘｒｏｓｓ事業課の鈴木祥太氏が「ソフトバンクの地域創生～テクノロジーの力で地域の未来を拓く～」をテーマに基調講演を行った。

鈴木氏は、ソフトバンクでは「地方」創生をあえて「地域」創生と呼んでいるとしてその意義を説明。ＡＩ等のテクノロジーを活用した同社の取り組みについて、静岡県の事例を紹介し、地域の魅力向上と課題解決の二つの視点から次のように述べた。


基調講演を行う鈴木氏

静岡県は製造業が県内の売り上げの約４割を占め、全国的にも高いシェアを持つ。また、全国屈指の漁獲量も誇っている。観光地としても世界遺産の富士山や温泉など多くの人気スポットがあり、２０２２年度は年間約１億２５００万人の観光客が訪れた。

ソフトバンクでは、静岡県でテクノロジーを活用したスマート養殖を行っている。カメラとＡＩを使用して魚の個体識別や成長度合いの判別を行い、効率的な養殖や収穫を実現している。また、ＡＩを活用した魚の数や成長度合いのシミュレーション技術も導入されている。

観光ＰＲではメタバースを活用し、静岡の魅力を若者や旅行者にアピール。ＺＥＰＥＴＯ（ゼペット）と呼ばれるメタバースプラットフォームを使用し、さまざまな体験やイベントを提供している。

静岡県の課題の一つは、転出超過数が全国７位であり、特に若者の転出が顕著であること。その理由として、大学進学が約６割、就職が３割強を占めており、特に10代から20代では９割が転出している。課題の二つ目は、静岡県の企業の多くがまだＤＸに取り組んでいない状況にあることだ。これには、ノウハウの不足やＩＴ人材の不足が挙げられる。製造業でもＤＸの遅れが目立つ。これらの課題解決には、テクノロジーの活用が不可欠であり、大学、オフィス、製造現場などでそれぞれの取り組みが行われている。


講演に耳を傾ける参加者

前・地域活性化センター副参事
●斯波省三（埼玉県
企画財政部計画調整課主査）

多文化共生の社会へ
― これからの外国人の受け入れ方 ―

令和５年１月１日現在、日本全国で約 300 万人の外国人が暮らしており、コロナ禍を除けば、ほぼ毎年増加している状況である。こうした状況の中、行政等の窓口や教育現場などにおいて、言語の壁によって意思疎通がうまくいかず、コミュニケーション不足に陥ったり、地域内でトラブルが起きたりしている。一方で、地域で働きながら自治会長を務める外国人もでてくるなど、外国人が地域を担う人材としても期待されている。そのため、行政サービスや自治会などの地域コミュニティにも多文化共生の考えを浸透させる必要がある。

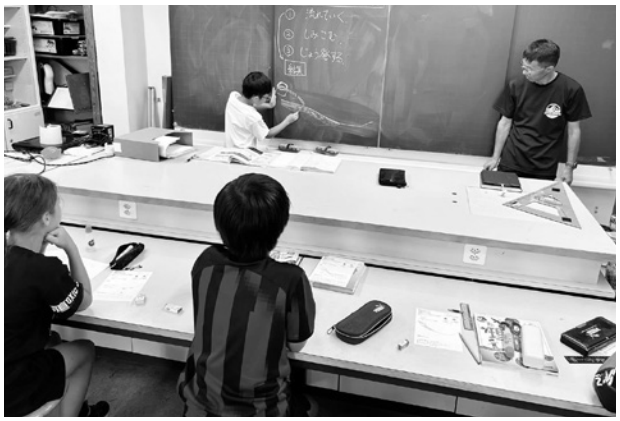
スイス①

多文化、多言語に触れる

調査地スイスは人口８６０万人の人口規模の中で、四つの国語を持っている多文化多民族国家である。またスイスは欧州から移民が集まっている国でもある。そこで、言語学習に力をいれているチューリッヒ日本人学校やスイス最高峰の日本語学科があるジュネーブ大学を取材し、多文化教育に生かすことができる事例を調査。調査結果を参考に筆者の派遣元に対し三つの事業を提案する。

チューリッヒ日本人学校とジュネーブ大学を訪問して、言語や多文化を理解するためには、言語や多文化に触れさせる環境を多く用意する必要があることがわかった。また、言語が違う学校に編入することはスイスのように移民の受け入れ制度が整っている国でも難易度が高い。

言語を学ぶためにはその文化を学ばないといけないが、日本の現状について考えると、東京での生活は、人は多いのにつながりにとぼしく、孤独に陥りがちである。一方、地方には東京にはない人のつながりや魅力があり、これらを対外的に発信することで地方の魅力を外国人に伝えられる可能性を感じた。



日本人学校での授業の様子



中央の女性がジュネーブ大学文学部助教　セレニ・コンスタンス氏

提案事業

①日本人への多文化教育、専門的な人材の育成

ＪＥＴプログラム等を活用し日本人と外国人が触れ合う機会を提供する。またＪＩＣＡと協力して青年海外協力隊の活動を小中学校の総合的な学習の時間を利用して紹介する授業を開催する。

海外の文化に触れる機会を多くすることで多文化への興味を促進し、地域に住む外国人や多文化を受容できる感性を育成することが目的である。

②外国へのＰＲ（地域の外国人、ＪＥＴプログラム、ＪＩＣＡ）

外国人材を活用した情報発信をする。在住外国人が切り取った日本の良いところを発信することで、外国人の感性に合う日本の魅力を伝えることができる。

③「多文化フリースクールこが」の開設と地域活動への参加支援

小学校、中学校の段階で日本の学校に転入してくる児童生徒向けにフリースクールを開設する。さらに、フリースクールを古河市の外国人支援施設や古河市国際交流協会等の拠点施設としても使ってもらうことで支援を必要としている外国人を発見しやすくする。

前・地域活性化センター副参事
●塚田健人（茨城県古河市
商工観光課主幹）

「サイクリングのまち 加須市」定着のために
― スイスのツアーに学ぶ ―

埼玉県加須市では、第２次加須市総合振興計画に基づき、病院を核とした新たなまちづくりを推進している。これにより、加須市の将来都市像「絆でつくる緑あふれる安心安全・元気な田園都市加須」を実現し、まちの魅力を高めることを目指している。この中で、サイクリングを活用した観光が重要視されており、地域の自然や街並みを生かした観光事業が展開されている。加須駅周辺には既に案内所やレンタルサイクルステーションが存在し、遊休施設の活用も検討されている。令和５年 10 月には、渡良瀬遊水地を舞台に「KAZOLING CYCLE EXPO」を開催。ゲストトークショーやストライダーレース、自転車芸人ライブなどが行われ、サイクリングイベントを通じた地域活性化を推進した。

地域住民との協力が不可欠

調査対象としたスイスのチューリッヒは、市内周遊型サイクリングツアーが注目されており、電動自転車を利用したガイド付き観光や歴史的建造物を巡るツアーが提供されている。これにより、市の歴史や文化、自然、食などを楽しむことができる。一方、ジュネーブでは、レマン湖の自然と大噴水を生かしたサイクリングツアーが展開され、まちの歴史を学びながら、美しい自然を満喫することができる。今回の調査では、スイスの観光におけるサイクリングツアーの取り組みを調査した。


ジュネーブ レマン湖の大噴水


加須市 渡良瀬遊水地のサイクリングロード

チューリッヒは、スイス最大の都市で観光局がサイクリングツアーを運営している。観光案内所では多様なツアーが提供され、電動自転車も用意されている。民間団体で自由にプログラムを計画し、ツアーは複数の団体が連携して運営している。観光客だけでなく地域の人にもメリットを提供し、地域の理解と協力を得ている。

ジュネーブはスイス第２の都市で、金融業や国際連合の拠点である。観光局は約60人の職員で構成され、宿泊税で財源を得て、レマン湖を中心にガイド付きサイクリングツアーを提供している。地域全体で観光客を歓迎し、地域の人々もサイクリングツアーのガイドなどを通じて、観光業に参加している。学生はまちの歴史をフィールドワークで学び、若い世代の地域愛醸成にも力を入れている。

加須市が「サイクリングのまち」として定着するためには、地域の人々と地元事業者の協力が不可欠である。地域住民がまちの魅力を体感し、愛着を持つことが重要であり、地域の歴史や文化に触れる機会を数多く提供することが求められる。

加須市の魅力を伝えるため、地域の人々や地元事業者が主体的に活動するような風土づくりを目指していきたい。

前・地域活性化センター副参事
●卯木孝明（埼玉県加須市
総合政策部政策調整課）

こどもが好きな海の遊びは？
―こども家庭庁と国土交通省が調査―

こども家庭庁と国土交通省は、海での遊びの経験や、海でやってみたい遊びについてこどもや若者に聞いた「こども若者★いけんぷらす　海遊びのこと」の結果をまとめた。それによると、「やってみたい海のレジャー」は「水上オートバイに乗る」や「ダイビング」などが多く、「乗ってみたい船」では「クルーズ客船」が最も多かった。

「こども若者★いけんぷらす」は、国がこどもや若者の意見を広く聴き、制度や政策に反映できるようにするのが狙い。こども家庭庁や各省庁がテーマを設定してこどもや若者（ぷらすメンバー＝小学校1年生～20代の若者で登録した者）の意見を聞くほか、こどもが選んだテーマについて意見を伝えることもできる。

水上バイクやダイビングに興味

まず、海で遊んだ経験や、一番楽しかった海遊びについて聞いた設問。「海でどのように遊んだことがあるか」（複数回答）には▽「水に触る、水に浮かぶ」85・2％▽「砂遊びをする」79・5％▽「砂浜や海岸で海をながめる」78・1％▽「泳ぐ、ゴーグルなどをつけて海の中を見る（シュノーケリングを含む）」66・2％▽「磯や砂浜で生き物をさがす」62・9％―が6割を超えた。

一方で、「海で遊んだことはない」との回答も4・8％あった。

「海遊びで一番楽しかったもの」（単数回答）は▽「泳ぐ、ゴーグルなどをつけて海の中を見る（シュノーケリングを含む）」22・9％▽「砂浜や海岸で海をながめる」20・5％▽「水に触る、水に浮かぶ」15・7％―などが比較的多い。

「その他」には「貝殻拾い」「キャンプ」「バーベキュー」「ボディボード」などがあるが、現状では、一般的な〝海水浴〟以外の遊び、レジャーを経験する子どもはさほど多くないと考えてよさそうだ。

図1は「やったことがないがやってみたい」海のレジャーを聞いた結果（複数回答）。多い順に▽「水上オートバイ（水上バイク）に乗る」34・8％▽「ダイビング」33・8％▽「釣り」29・5％▽サーフィン28・1％▽「SUP」26・2％▽「カヌー・カヤック」26・2％▽「水上オートバイ（水上バイク）を運転する」24・3％―などとなった。

これまでに乗ったことのある船について聞いたところ（複数回答）、▽「遊覧船」57・6％▽「フェリー」（55・7％）▽「人力ボート（手こぎ、足こぎなど）」41・4％▽「高速船」24・8％▽「クルーズ客船」16・7％▽「漁船」12・4％▽「ヨット」8・6▽「プレジャーボート」6・7％―など。

船に乗るならクルーズ船

乗ってみたい船について聞いた結果が図2（複数回答）。「クルーズ船」が最も多く65・7％が「乗ってみたい」と回答しており、続いて▽「漁船」31・4％▽「ヨット」30・5％▽「フェリー」25・7％▽「高速船」21・9％―などの順となった。「漁船」というと、漁業に携わる本格的な船が思い浮かぶが、ここではいわゆる釣り船がイメージされているのかもしれない。

今回の調査では、こども・若者がどのようなSNSを使っているかについても聞いている（複数回答）。結果は多い順に▽LINE 81・0％▽YouTube 76・7％▽Instagram 54・8％▽X（旧Twitter）51・4％▽TikTok 20・0％▽Facebook 18・6％▽Threads 10・5％―など。

調査は2023年9月～10月にWebアンケートを実施。210人から回答があった。

回答者の内訳は、男性36・7％、女性57・1％。年齢内訳は▽「6～9歳」8・1％▽「10～12歳」16・2％▽「13～15歳」20・5％▽「16～18歳」19・5％▽「19～22歳」14・3％▽「23歳以上」21・4％。

居住地別では▽北海道・東北11・9％▽関東41・0％▽中部15・2％▽近畿16・2％▽中国4・8％▽四国1・9％▽九州8・6％―となっている。

（地域創生・情報広報グループ）

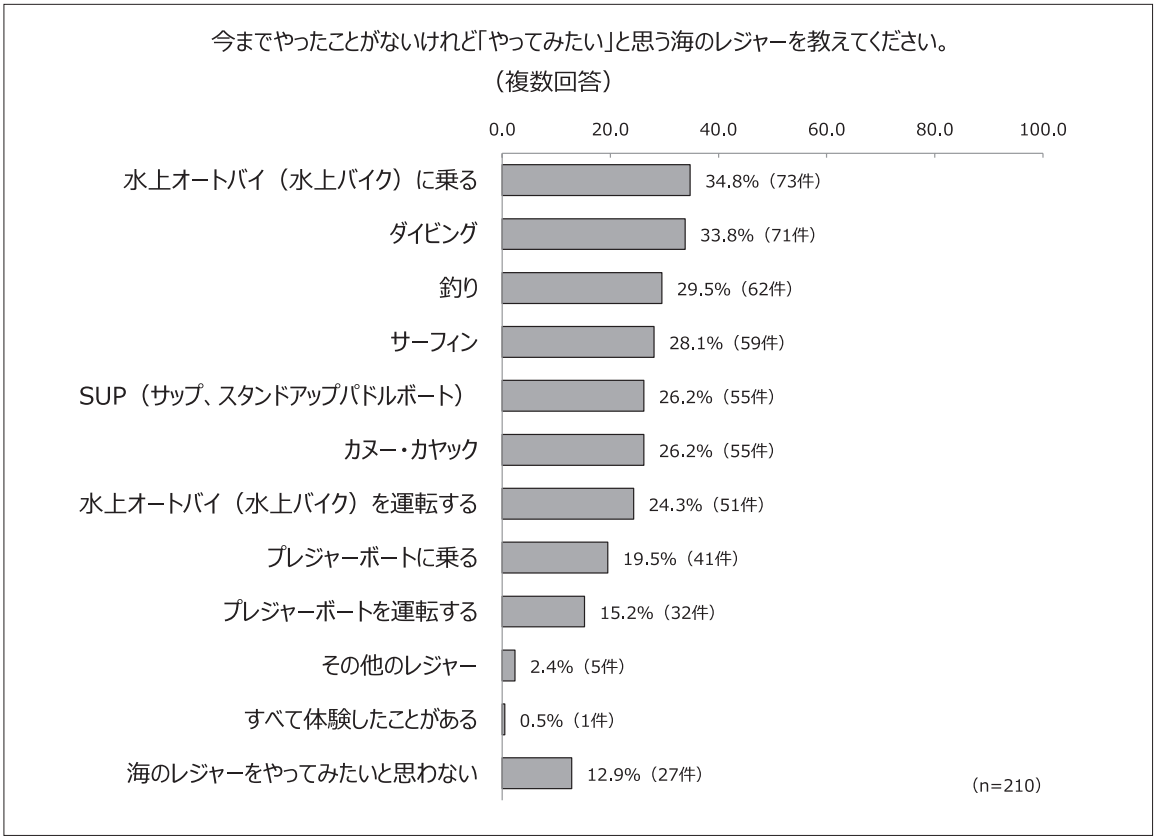


図１

（出典：こども家庭庁 HP 掲載資料より）

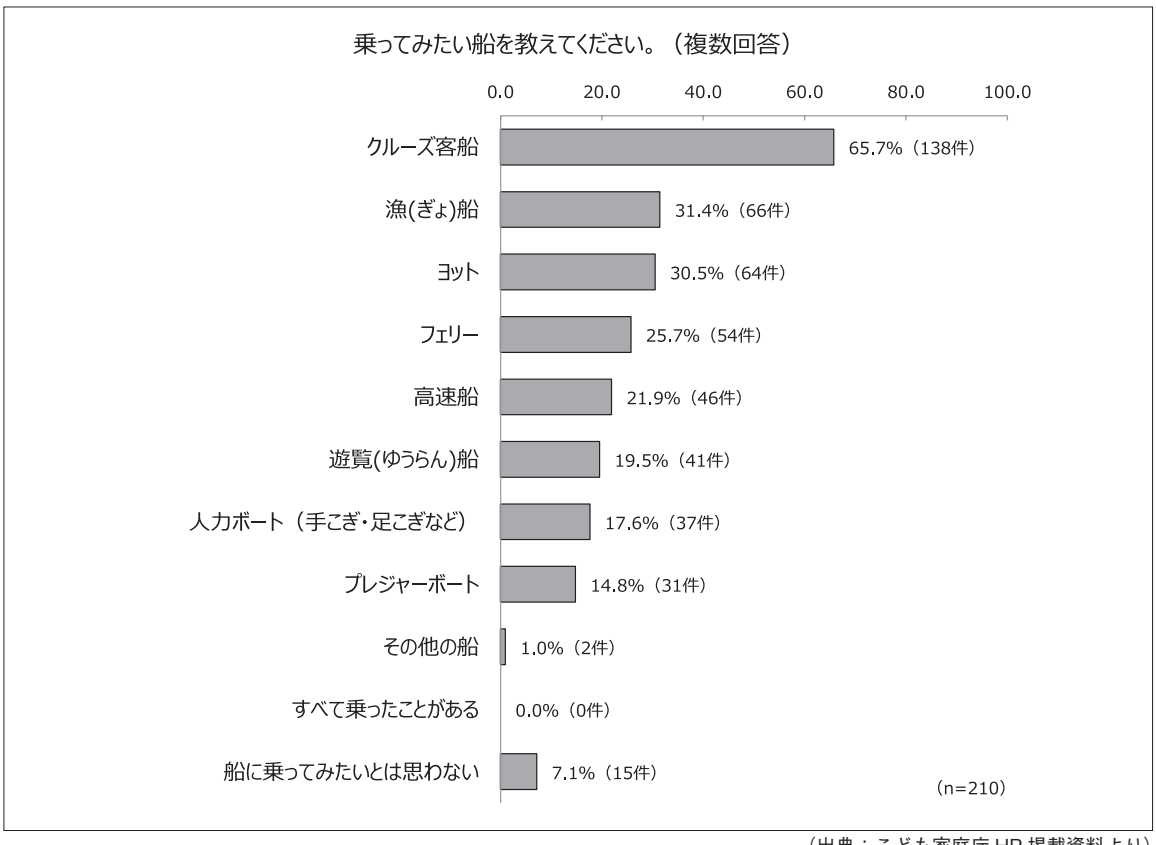


図２

（出典：こども家庭庁 HP 掲載資料より）

《連載》連携団体の取り組み

嘉悦大学

地域活性化センターは、地域づくりに取り組む団体のうち、地域づくりは人づくりからというセンターの理念に共鳴する団体と連携協定を締結し、さまざまな事業等を実施しています。連携団体の取り組みを紹介する連載、今回は嘉悦大学です。（企画・人材育成グループ）

「問いを立てる」フィールドスタディ

―そのプログラム開発の意義と実践―



嘉悦大学
経営経済学部 准教授
● 岩月 基洋

嘉悦大学は東京都小平市にある「経営経済」単一学部の小規模大学です。建学の精神である校訓「怒るな働け」に基づいた「実学」を重視した教育を行っています。地域活性化センターとは大学連携事業として「地域を知る」ことをテーマに２０１６年から活動をしています。これまで主に担当職員の派遣元である自治体を対象地として、鳥取県（大山町）、宮崎県、秋田県由利本荘市、山梨県、三重県四日市市で、現地を訪問することを中心に据え、経験的な学習を重視したプログラムを実施してきました。参加学生は、最長で３年かけて自身の研究テーマとして対象地と向き合うことになります。また担当職員にとっても最長２年かけて、首都圏の学生の視点というフィルターを通じて、また地域の外の視点から自身の地域と向き合うことになります。双方にとっていかに自身の中で「問い」を立て、地域理解を深めていくかということがこのプログラムの意義になります。

地域との接点を多くつくるために

２０２３年度は、福井県を対象地として全８回にわたる連携プログラムを実施しました。メインは現地でのフィールドワークを中心とした視察、調査の実施ですが、それまでに、センター職員による講義、関連イベントへの参加や施設の視察を通じて地域の現状や課題についてさまざまな形で知るようにしました。設計の中で重視したことは「リアルな体験を増やす」ということです。地域活性化を考える入口として地域課題の解決を意識しすぎると、与えられたものへのアプローチとなり、学生自身が考えるべき「問い」を狭める可能性があるからです。そのため具体的な取り組みの中で自分が地域と触れることができる機会を多くつくることが必要となります。合わせて、第三者である「お客様」として関わるだけでなく、スタッフとして実習の形式で参加し「当事者」として関わりを持つことで意識を変えることも必要です。

実際に上野駅で開催された北陸新幹線開業イベントの福井フェアを視察した際も、ただ調査するだけでなくスタッフとしてフォトブースやマルシェの販売ブースでお手伝いをさせて頂きました。わずかな時間ではありましたが、地域側として来場者と関わることでその地域とのつながりをつくることができたと感じます。また地域ＰＲ施策の講義や地域の名産を知るアンテナショップ訪問による体験を生かして、学園祭イベントで福井県の特産品の販売を行いました。商品の選定や仕入れを自分たちで行い、ＰＲ方法を考えて実践することはまさにリアルな体験です。これらを通じて得たマーケティングデータとしてのお客様の反応はさまざまです。「思っていたよりも売れた」「意外と商品の認知度が高かった」など、リアルな情報に触れることで、学生たちは地域への愛着を高めることになりました。

現地で何を見るかの視点

これまで見てきたように、多くのプログラムの実施を通じて地域を知っていくわけですが、最も大事なことは一次情報に触れることです。実際に現地に足を運び、住民や関係者と対話し、地域の課題やニーズを直接把握することで、自分ごととして「問い」を立てることにつなげていきます。そのために経験的な学習を通じたプログラムは有効な手段となります。その中でネット情報など二次情報を通じて「知りすぎないこと」も必要です。ネットではわからない、まちの様子を体感することを通じて知るために、現地訪問では自由調査と称する時間を多めに取っています。そこで学生たちは思い思いのテーマを持って調査計画を立て、各々でフィールドワークを行い知見を獲得していくわけです。

一方で、このようなフィールドワークではあくまで第三者的な視点を持って地域を見ることが、大学生が地域を対象にプロジェクトを実施する上で大事です。一度入り込んで

しまうと、よそ者としての視点が獲得しにくくなります。今回、福井県は「100年に一度のチャンス」と言われる新幹線開業を間近に控え、街なかでは至るところで変化が目に見える形で起こっている状況でした。開業後であればその変化を見ることはできないので、観察者の視点を持って、何か気になること、不思議なことに気づき「問い」を見つけるチャンスが大いにあり、その意味ではまさにその時にしかできない旬のプログラムであったといえます。とても幸運なタイミングで行うことができた貴重なプログラムになりました。今後学生たちはそれぞれ得た「問い」に対してより深い探求を重ねてまとめをしていくことになります。



上野駅での福井県 PR イベント参加の様子

あたりまえに目をつけてみる

これまでの代表的な成果を紹介します。ある学生は、対象地として訪問した三重県四日市市が工業地帯であり、名古屋にほど近い立地から、経済圏として栄えている地域という印象を受けました。そしてやはり「公害」というキーワードで認知される側面が強いということが行ってみて改めて理解できたわけです。そのイメージを変えたいという思いを現地の方々から伺うなかで、観光PRとして何か地域に特徴的なものを生かせる方法はないのかと考えていきました。何度か現地に足を運んでいるうちに、地域に点在し歴史を感じられる味のある店や場所は、首都圏の若い学生の視点では「レトロ」として捉えられ受け入れられるのではと考えました。そこで「四日市レトロ」と称して、情報マップを作成しました。成果物は観光協会やお店などに置いてもらうことになり、新たな観光資源の発掘ということを目に見える形にしました。これは行政ではなかなかできないことを、学生だからこそ実現したものであり、経験的な学習を通じて地域の歴史や文化、産業などの資源を理解し、それらを生かした地域振興のアイデアやプロジェクトを立案・実行することを可能にしたといえます。


プログラムでの地域 PR 講義の様子


福井県越前市の現地視察でのまち歩きの様子

このように連携事業を通じて地域と多くの接点を持った学生は、これを縁として愛着を持ち、将来高い確率でふるさと納税の寄付先として対象地域を捉えるなど地域への貢献を果たす可能性があります。その後も関係人口として関わり続けるような機会を、これからも協働して生み出していければと思います。



学生が制作した四日市レトロマップ

センター通信

一般財団法人 地域活性化センター
Japan Center for Regional Development

ふるさとの魅力発信を応援します！

―日本全国ご当地情報満載―

地域活性化センターでは、地域の最新の情報を気軽に見つけることができるWEBサイト「ふるさと情報コーナー」を運営しています。観光・イベント・物産など、全国の都道府県・市区町村の気になる情報が満載！　気になるまちの情報を調べる際に、ぜひご活用ください。都内の自治体アンテナショップを巡りやすくするデジタルマップも閲覧できます。

また、ふるさとの魅力を発信するプロモーションを支援するため、今年度も「地域プロモーションアワード」を開催します。地域の魅力をたっぷり詰め込んだこだわりの作品を募集します。入賞作品は、ふるさと情報コーナーのWEBサイトでも公開予定です。昨年度の入賞作品は現在公開中ですので、ぜひご覧ください。

詳しくは以下の二次元コードからそれぞれのWEBサイトにアクセスしてください。



※地域活性化センターが所在する日本橋プラザビルの1階東側にはデジタルサイネージを設置しています。タッチ操作で簡単に「ふるさと情報コーナー」や「自治体アンテナショップ」を閲覧でき、いつでもふるさと巡りをすることができます。

「ふるさと情報コーナー」
WEBサイトはこちらから→







いばらき

天然色旅

さあ、カメラを持って出掛けよう。











茨城県営業戦略部観光物産課

首長の思い
column



「こだまでしょうか、いいえ、だれでも。」
～ひとが輝き、やさしさがこだまするまちを目指して～

山口県長門市長　江原　達也

長門市は、本州の最西北端・山口県の北西部に位置する人口約3万人のまちです。海岸線は北長門海岸国定公園に指定され、日本海の荒波に浸食された岩と白い砂浜が出入りし、変化に富んだ雄大な自然景観を生み出しています。さらには、「長門湯本温泉」をはじめ趣の異なる五つの温泉郷が存在しています。

こうした豊かな自然を背景とした農業や畜産業、水産業、加えて観光産業は本市の基幹産業であり、水産業では、漁業関係者から評価の高い剣先イカやアジの水揚げに加え、マグロの養殖やトラフグの陸上養殖が行われています。特に養鶏業は、県内鶏肉生産量の7割を占める上に、一人当たりのやきとり店舗数が全国トップクラスに位置するなど、「やきとりのまち」としても知名度が上がってきています。

しかし近年は、全域が過疎地域に指定されるなど、人口減少が急激に進んだ結果、生産年齢人口の減少により、基幹産業において後継者不在や労働力不足などの課題が顕在化してきました。そのため私は、このまま手をこまねいていては、人口減少による負の連鎖に陥ることから、これら課題の克服には若者の定着とUターンが欠かせないと考え、そのための手段を集中的に講じています。

まず、従事者の高齢化が顕著となっている第1次産業においては、若者が魅力を感じ、参入したくなる持続可能な成長産業に押し上げようとしています。漁業収入の拡大に向けて、アワビの中間育成や赤ウニ・マガキの養殖支援に取り組むほか、農業では、業務の省力化・省人化につながるスマート農業の推進や販路拡大に取り組み、「稼げる」農業従事者の育成に努めています。

また、増え続ける耕作放棄地を逆手に取り、所得増につながる有機野菜農場として利活用する民間活力の誘致に成功し、畜産農家から排出される自然由来の堆肥の有効活用に結び付け、昨年3月、中国地方で初の「オーガニックビレッジ宣言」を発するに至りました。

次に、若者の希望する働く場の確保と地域経済の活性化を図るため、本市にこれまで立地のなかった若者に人気の情報通信関連企業の誘致を進めることとし、高速ブロードバンド環境を市内全域に整備した上で、現在、その集積拠点施設を整備しているところです。ゆくゆくは市内企業との連携による市内産業の生産性向上やDX化、人材の育成・定着など、好循環を生む社会システムの構築を図っていく考えです。

さらに、希望する若者が、安心して子どもを産み育てることができる環境や支援体制の充実という「切れ目のない一貫した子育て支援」に取り組んでいます。その際も、子育て世代の方々と10カ所に及ぶミーティングを重ね、何ったご意見を十分反映したところです。

具体的には子育て世代の経済的負担の軽減を図るため、小・中学校における給食費を無償化したほか、高校卒業時までの医療費を完全無償化しました。また、出産時にはおむつ代等の助成、小・中学校入学時にはお祝い金支給、小・中学校最終学年には修学旅行費補助をはじめ、小学1・2年生には本市独自の英会話支援といった先進的な学習環境を提供しています。

本市出身の童謡詩人・金子みすゞさんの代表作の一つに「こだまでしょうか」という詩があり、「『ごめんね』っていうと『ごめんね』っていう。こだまでしょうか、いいえ、だれでも。」と締めくくられています。私はこの作品から、みすゞさんの思いを「やさしく話しかければ、やさしく相手も答えてくれる。誰にでも相手を思い、やさしく接するように」ととらえ、「ひと」を呼び込む「輝く人」を育むとともに、「やさしさがこだまする、子育て世代に選ばれるまち」の実現に全力で取り組んでいるところです。

手前みそですが…

福岡県

糸島市 305

人とまちの魅力が輝く 豊かさ実感都市　いとしま



■芥屋の大門と芥屋集落
糸島半島の突端に日本三大玄武洞の芥屋の大門があり、遊覧船に乗ると、海から柱状節理（溶岩が固まってできる独特の地形）が見事な海蝕洞が見られる

■芥屋の大門

糸島市は、平成22年１月に前原市、二丈町、志摩町が合併し誕生しました。福岡県西部に位置し、北側には玄界灘に面した美しい海岸線が広がり、南側には脊振山系の山々が連なり、それらの中間部はなだらかな田園地帯が広がり、数多くの景勝を見ることができます。

福岡都心から電車で乗り換えなしで訪れることができるため、住みたい街、レジャースポットとして人気があります。海辺にはおしゃれなカフェやレストランが点在。また、工房やクラフトギャラリーを持つ作家さんが多数活躍しています。

「糸島ブランド」として知られる食材は、農産物・海産物だけでなく、伝統的な手法で作られた醤油・酒造なども有名で、食の宝庫として新鮮美味の食材があふれています。冬にオープンする牡蠣小屋では、新鮮な牡蠣を自分で焼いて食べることができ、市内外を問わずたくさんの人でにぎわいます。



■白糸の滝
福岡県の指定名勝で、夏には涼を求め、たくさんの観光客が訪れます。そうめん流しやヤマメ釣りも楽しめます



■櫻井二見ケ浦のしめ縄掛け替え
糸島市の海のランドマークである櫻井二見ケ浦の夫婦岩。年に一度、５月の大潮の日、大しめ縄が氏子らによって掛け替えられる様子は圧巻



■幣の浜の夕日
弓なり６㌔の砂浜が続く遠浅の海岸、幣の浜。夕陽の沈む様は美しく、その視界の先に名勝、芥屋の大門が見える。サーフスポットでもある



■いちご狩り
市内各所の農園でいちご狩りが体験でき、さまざまな品種のいちごを楽しめます



■髙祖神楽
福岡県の指定無形民俗文化財。約 550 年の長い歴史と伝統を誇り、地元の神楽保存会によって伝承されています



■二丈赤米田んぼアート
二丈地域の棚田では古代米の赤米が生産されており、収穫の時期には田んぼアートが楽しめます



■二丈岳山頂
糸島は日帰り登山のスポット。標高 711㍍の二丈岳山頂から眼下に広がる市内の様子は絶景です

地域づくり７月号

2024 年７月１日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代)
https://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します
落丁・乱丁はお取り替えします。編集室（03-5202-6139）E-mail：hensyuu6139@jcrd.jp まで、ご連絡下さい。

地域活性化センターからのメールマガジン登録はこちら

地域づくり7月号（通巻421号）　令和6年7月1日　一般財団法人　地域活性化センター発行


一輪車


宝くじ桜


子宮がん検診車

宝くじは、みんなの暮らしに役立っています。


救急普及啓発広報車


宝くじドリームジャンボ絵本


集会用テント


「健康手帳」（冊子）


ベンチ


リスザル展示施設

宝くじは、少子高齢化対策、災害対策、公園整備、
教育及び社会福祉施設の建設改修などに使われています。

あなたに夢を。街に元気を。
クーちゃん　宝くじ

一般財団法人日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
https://jla-takarakuji.or.jp/

2024
7
ISSN 1340-8917



水辺の観光まちづくり

地域づくり
特集編

目 次　表紙裏 グラビア

2~5 基調論文／大下　茂
水の特性を巧みに生かす

6~7 然別湖ネイチャーセンター（北海道鹿追町）／齋藤夏月
然別湖と共に

8~9 一般社団法人十和田奥入瀬観光機構（青森県十和田市）／安藤巖乙
唯一無二の自然景観を生かす

10~11 佐原おかみさん会（千葉県香取市）／平塚智子
小野川の流れにこころ癒やされて

12~13 NPO 法人 ORGAN（岐阜県岐阜市）／蒲　勇介
観光まちづくりで持続可能な好循環を

14~15 公益財団法人松江市観光振興公社（島根県松江市）／足立薫平
歴史と未来を感じる堀川遊覧船

16~17 愛媛県愛南町／蓮田修平
海辺の絶景を走って巡る

18~19 一般社団法人土佐町スポーツコミッション（高知県土佐町）／古賀智志
さめうらダム湖から広がるまちづくり

20~21 長崎県島原市／吉田将尚
名水百選に選定された湧水のまち

22~23 トピックス
こどもが好きな海の遊びは？

24~27 副基調論文／安本達式
文化、環境、防災から見た現状と展望

28 都道府県漫遊（茨城県）

表3 手前みそですが…（福岡県糸島市）

2024 年 7 月 1 日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター ©2019 jcrd.jp
東京都中央区日本橋 2-3-4 日本橋プラザビル 13 階 電話 03-5202-6131（代）https://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

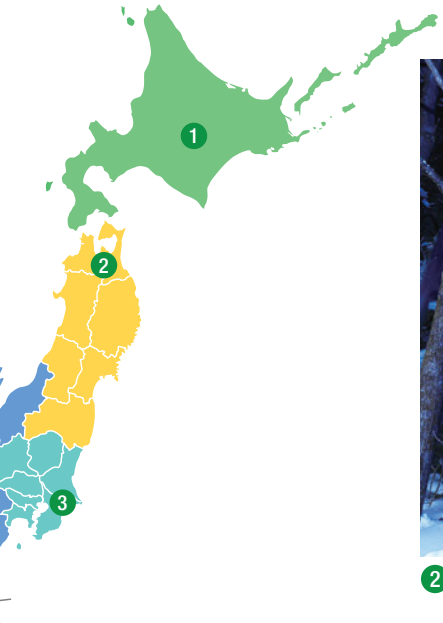
本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

水辺の観光まちづくり

四囲を取り巻く広大な海と、豊かな川や湖に恵まれた日本。あらゆる面で生活にかかわり、身近な存在である水辺の価値を見直し、新しい可能性を見いだして観光や地域活性化につなげている取り組みを紹介する。



1 然別湖ネイチャーセンター（北海道鹿追町）（p6-7）
凍結した然別湖の上に作ったイグルー内のアイスバー





2 一般社団法人十和田奥入瀬観光機構
（青森県十和田市）（p8-9）
冬季観光の目玉としてはじまった氷瀑ナイトツアー



4 NPO法人ORGAN（岐阜県岐阜市）（p12-13）
長良川の船上で行われる船遊び



3 佐原おかみさん会（千葉県香取市）（p10-11）
小野川を進むさわら雛舟



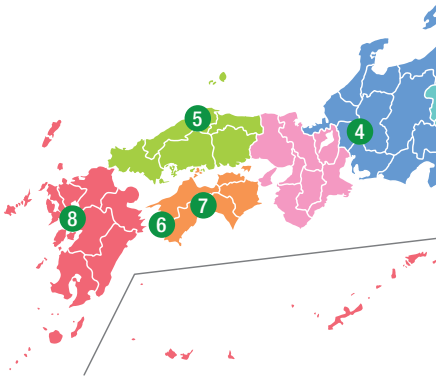
6 愛媛県愛南町（p16-17）
愛南町最大の絶景ポイント・高茂岬を巡るランナーたち



5 公益財団法人松江市観光振興公社（島根県松江市）（p14-15）
国宝松江城を囲むお堀約３・７キロを約50分かけて1周する



7 一般社団法人土佐町スポーツコミッション（高知県土佐町）（p18-19）
地域のカヌー競技クラブ「さめうらカヌーアカデミー」





8 長崎県島原市（p20-21）
今も残る武家屋敷街の水路

水辺の観光まちづくり

水の特性を巧みに生かす
―地域資源の総合プロデュースを―



（株）KITABA相談役・内閣府地域活性化伝道師
● 大下 茂

多彩に変化する水辺の景

水辺ほど様相が変化する対象はない。鏡のごとく月を映し出す水面（みなも）ばかりではなく、北斎の代表作・神奈川沖浪裏（かながわおきなみうら）に描かれている景、とうとうと流れる大河を眺める水辺や歓声とともに急流を下る活動の景、古今東西の鑑賞対象としての滝、山間地に突然生まれたダム湖等、その活用を総論として論ずるには多彩すぎる。気象との関係で刻々と様相が変化するのも水の景の特徴である。

観光との関わりをみても、眺める、近づく、触れる、入る、流れに身をおくといった体験のみならず、港町や河岸、城下町の堀割等、地域の成り立ちは水辺が大きく関わりを持って今日に至っており、時間の流れをさかのぼって往時をイメージして地域を見たときに新たな光景が目の当たりに見え隠れすることもある。

本稿では、このような多彩な水辺の景の特性を踏まえた上で、水辺を生かした事例から観光まちづくりの推進を先導するに倣っておきたい考え方を論じたい。

「浜大漁に岡万作」をテーマに

千葉県九十九里町は、新全国総合開発計画では大規模レクリエーション基地が構想される等、海水浴場として著名な地域である。海水浴場としての歴史は長く、1910（明治43）年に片貝海水浴場に地元の向上会の手により無料休憩所も開設された。徳冨蘆花との交流や高村光太郎の妻・智恵子が療養する等、浜辺の特性を生かした通年型の地域活力向上に向けた戦略に早くから取り組んでいた。

九十九里浜一帯は平坦と思われるが海岸線に沿って微地形を有する地域であり、もとも

筆者プロフィール

大下 茂氏
（おおしも・しげる）

東京工業大学大学院博士課程修了。技術士（建設部門　都市及び地方計画）、博士（工学）。

1989年9月に㈱プランニングネットワークを設立後、2001年より東京工業大学工学部、立教大学観光学部兼任講師。2012年4月帝京大学経済学部観光経営学科教授、2024年3月に退任、現在に至る。2014年4月、内閣府の地域活性化伝道師に登録。専門領域は、『集客』・地域の視点での観光まちづくり（地域の記憶と市民協働）。（公財）利根川・荒川水源地対策基金評議員、東京都観光事業審議会会長、市町村の総合計画審議会会長等も兼務。

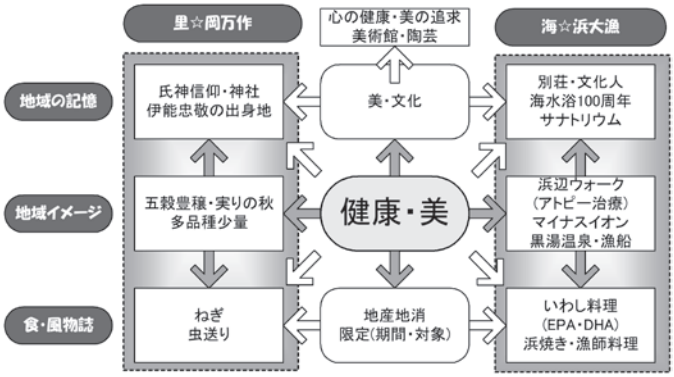


図　ワークショップで導かれた九十九里町の地域資源コンセプトマップ
出典：拙著「「集客まちづくり」の技術」、p70、学陽書房

とは内陸に農耕を主とする集落が形成（「親集落」と称している）され、その後、新田拡大のための「子集落」が海岸線と親集落の間に広がり、最後に海岸線沿いに漁のための集落（「孫集落」）へと展開されてきた。イワシが漁の主たる魚種で、江戸時代には干イワシ（干鰯）は高価な肥料として地域の特産品となっていた。地元ではイワシが大漁に水揚げされると、それを肥料とするため、内陸部（岡）の農耕は万作となることを称して「浜大漁に岡万作」とうたわれていたのである。

しかし近年の海水浴の人気の低迷から夏の観光入込み客数は漸減しつづけていた。地域活性化を目指す九十九里町と商工会は、浜だけでなく地域全体の地域資源を再度見直し、中心に「健康・美」を統一テーマとして据えることで、地域に長くうたわれてきた「浜大漁に岡万作」を地域が一体となってつなげることができる資源マップを作成（図参照）、地域内の伝統行事をはじめとし新しい文化活動を総合プロデュースした観光まちづくりの展開を模索することとした。地域の成り立ちにまでさかのぼって地域資源を再発見した取り組みは、他の地域も倣うことができる思考であると言えよう。

観光振興プランの重点戦略に

現在浅草からスカイツリーにかけての地域には多くの訪日外国人観光客が往来しており、隅田川に架かる吾妻橋上で写真撮影をしている観光客も多い。橋上や橋詰広場は、まち歩きを楽しんでいる観光客にとっては、連続するまち歩き体験の中で、変化するリズム感と開放感が得られる恰好の撮影スポットである。また、隅田川を行き来する水上バスは、乗船体験も楽しみであるが、河面に変化と動きを生み出す撮影対象の一つでもある。

２０２３年は、関東大震災から１００年を迎える年であった。関東大震災の復興と言えば、すぐに帝都復興院総裁として尽力した後藤新平氏を思い起こす。中でも、隅田川をパリのセーヌ川にたとえ、復興橋梁をさまざまな形状の橋として架けることで、復興後の首都としての高い格付けと都市文化度の確立、さらに現在で言う都市観光の推進をイメージしたのである。新しく架橋された９橋とは、下流から相生橋、永代橋、清洲橋、両国橋、蔵前橋、厩橋、駒形橋、吾妻橋、言問橋であり、現在も当時の形状のまま、観光客を迎えている。この１００年前の帝都復興・都市形成に対する熱い思いが、そぞろ歩きやリバークルーズを楽しんでいる訪日観光客にも伝われば、観光体験に格別の想い出や物語が加わることとなろう。

また、今年２０２４年は荒川放水路通水から１００年を迎える。現在の隅田川沿いのリバーウォークを安心・安全に楽しめるのも、この治水事業があってのことである。周年事業を迎えるにあたり、国土交通省関東地方整備局荒川下流河川事務所が音頭をとって、東京都と沿川２市７区による荒川放水路通水１００周年記念事業がスタートしている。この一つの自治体である北区は岩淵水門（青水門・赤水門）が観光対象となっている。花火大会を荒川河川敷で開催する等、地域にとって貴重な観光スポットとなっており、周年事業に対して大学生をはじめとする地域住民が加わり、参加型のさまざまなプログラムが企画・実践されている。興味深い取り組みではあるが、残念なことに観光客をはじめ沿川住民には情報があまり伝わっていない。

河川は、多くの場合、国や都道府県が管理していることが多く、非常時の治水管理の観点から河川利用の諸手続は煩雑であり、観光的活用のハードルが高いと思われがちである。加えて、地域にとっては、国・都道府県との馴染みも薄い。そこでその橋渡しとして期待されるのが地元自治体である。地方自治体では、独自に観光振興プランを策定していることが少なくない。隅田川沿川地域の墨田区では「墨田区観光振興プラン」の五つの基本戦略の一つに「水都すみだの再生」をうたい、隅田川（東京都管理）の積極的な観光活用に取り組んでいる。北区では「北区観光振興プラン２０２３」の重点戦略の一つに「水辺を活用した観光コンテンツの充実」を掲げ、特に荒川河川敷（国

管理）の活用を、公公連携・公民連携の下に進めることを明記している。

観光客等にとって自治体と河川管理者との関係、所掌業務の分担は関係ない。利用者目線で地域関係者が一体となった取り組みの第一歩は、マスタープランとなる観光振興の計画に重点的に取り組む旨を明記し、位置づけを与えることから始められるのではないだろうか。

舟運を現在に再現

かつて多くの旅人の移動手段は河川を使った舟運であった。旅の自由化が実現するのは江戸中期以降であり、江戸を拠点とした庶民向けの行楽地として成田詣がブーム化した。2泊3日の行程が一般的であるが、時間的・金銭的に余力のある旅人は、木下河岸から利根川を下り、東国三社詣を楽しんだ。東国三社とは、古い歴史を有する香取神宮（千葉県香取市佐原）、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）、息栖（いきす）神社（同神栖市）の三社であり、近年ではパワースポットとして脚光をあびている。

利根川下流の右岸に位置する千葉県香取市佐原と、左岸の茨城県潮来市・鹿嶋市の三市が県境を越えて水郷三都観光推進協議会を設立したのは2005年であった。古くから水郷地帯と称されていたことを縁に連携を仕掛けたのである。仕掛け人であった佐原は、江戸時代中後期には、利根川舟運の河岸（川港）として「江戸優り」と言われる程の活況を得ていたものの地域活力の低下が顕著にみられ、舟運として利用されていた小野川、古い町並み、夏と秋の山車行事は、地域では「三悪」と呼ばれていた。佐原商工会議所の当時の会頭・小森孝一氏は、「ないものを嘆かずあるものに磨きをかけるまちづくり」をかけ声に、小野川の再生のための清掃活動と舟運の復活を試み、集客を実現したのである。水郷三都観光推進協議会の設立後は、成田空港との近接性を生かし、緒についたばかりの訪日外国人観光客誘致として、韓国、台湾、香港、オーストラリアなどの旅行社やメディアの誘致に加え、そのコンテンツの一つとして東国三社詣をイベントとして復活させたのである。

城下町は水活用アイデアの宝庫

城下町の造営においては、水は防御機能に加えて市中に生活用水を回すことの意味合いが大きかった。小藩ではあるが、織田信長の二男・信雄が宗家として形成した小幡藩（群馬県甘楽町）では、一級河川雄川から引き込んだ「大堰」と、この堰から取水し陣屋内に回されている「小堰」から成る「雄川堰」が水網のように張り巡らされている城をもたない特徴的な城下町である。雄川堰は、現在も地元住民が愛着と誇りをもって継承・管理しており、藩政時代からの姿を残している。観光地としての知名度はそれほど高くはないものの、雄川堰は「日本名水百選（環境庁＝当時）」「水の郷百選（国土庁＝同）」「水百選（農林水産省）」の認定や「土木学会選奨土木遺産」に選定されている。本物を追求している甘楽町や地域住民にとって雄川堰そのものが地域の自慢であり、文献史料に基づいた復元を加えた歴史風致の地域として、文化度を感じてほしい観光客を迎える観光まちづくりを志向して取り組んでいる。

国宝・松本城を有する松本市では、登城する観



市中に張り巡らされている雄川堰は地元自治体により日常的な管理がされている（群馬県甘楽町）



再生された小野川舟運（千葉県香取市佐原）

光客に対して、新たな観光体験の情報を発信している。その一つが湧水である。松本市街地中心部には、場所によっては都心のコンビニよりも高い密度で湧水が存在する程である。その理由は、盆地ならではの地形にあり、松本市街を囲んでいる山々と、そこから流れてくる川からもたらされる豊富な水量が源となっている。水質についても「平成の名水百選（環境省）」に選定されるとともに、「名水百選選抜総選挙」においては名水部門第3位（平成27年度）と観光地としては素晴らしい実績を残している。

松本市等では、水をテーマに歴史や町並みを歩いて楽しめるように、①水の生まれる町（所要時間約35分）②時代とともに守られた水（同約30分）③お堀の水をたどる（同約20分）の三つのショートコースで19の湧水を紹介した「まつもと水巡り」マップを作成し、まち歩きを推奨している。コース上には、酒蔵や和菓子等、名水の存在が背景にあることを感じさせる特産品とも巡りあえる。食との出会いも、観光地にありがちな観光客をターゲットとするものではなく、地元住民の日々の暮らしと直結していることから、観光地としての品格をも感じられる。

多様な体験プログラムの総合化を

本稿では、多様な水の特性を生かした観光まちづくりの先行事例の中で筆者が観光まちづくりに関わりを持たせていただいた一部の地域の事例からの学びを紹介した。

全国の多くの地域では、観光を通じた地方活性化が模索されており、観光客誘致に向けて競合しつつある。話題性のために奇をてらった取り組みもみられるが、それは長続きしない。水辺の活用を考えるにあたっては、むしろ、地域の成り立ちや履歴・暮らしぶりに学び、来訪者が希求しているものに近づくよう水のもつ多様な姿を総合化したプロデュースが求められる。地域資源の再認識・再発見にあたっては、風土・暮らしぶりを再認識すること、歴史・史実から発見すること、喪失したものを再認識すること、マイナス資源だと思っていたものをプラス志向で活用すること等から活用する地域資源に地域における意味合いを与え、それらを生かした個々の体験プログラムを「水」をテーマに総合化・パッケージ化することで、その地域にしかない新しい地域商品として創出・売り出すことができる。また、個々のアイデアの発意・発想は、地元の子どもたちや若者から募ることにより意外性のあるアイデアが生み出されることもある。地元自治体や観光関連団体、商工会議所や商工会等が全体をコーディネートすること、関係機関との調整役を担うことでひとつのアイデアが新たな地域商品・体験プログラムとして誕生するのである。

「持続可能な観光まちづくり」は、もはや定番のうたい文句となっている。本稿のテーマである「水」は器によって形を変える。水辺の観光まちづくりを進めようとする地域の足元には、観光まちづくりの源泉となる地域の成り立ちや地域が歩んできた履歴・地域の記憶とともに、次の出番を待っている脈々とした水が流れている。水辺を生かした観光まちづくりを進めるには、水の脈を受け止める器が、いま求められているのではないだろうか。地域の器の形に応じて、観光まちづくりに取り組む形態はさまざまであり、正解はないのかもしれない。地域の活力の源を受け入れる器づくりにこそ、まさに地域の個性が映し出されるのである。また、地域に流れる脈を手繰り寄せることで生まれる広域との連携への展開にも期待を寄せたい。

水辺を生かした観光まちづくりの新たな取り組みと持続的な展開に期待するとともに、見守っていきたい。

【参考資料】
○九十九里町（２０１０年８月）『九十九里新創世記―片貝海水浴場無料休憩所１００周年記念誌』
https://www.town.kujukuri.chiba.jp/cmsfiles/contents/0000000/420/100.pdf
○大下茂（２０１７年３月）『隅田川の記憶を読む～移り変わる風情に時の思いを重ねる』、すみだ地域学セミナー10周年記念誌（墨田区教育委員会）
○大下茂（２０１１年２月）『行ってみたい！と思わせる「集客まちづくり」の技術』学陽書房
○墨田区（２０１５年４月）『墨田区観光振興プラン』
https://www.city.sumida.lg.jp/kuseijoho/sumida_kihon/ku_kakusyukeikaku/kannkousinnkoupurann.files/sumidakuhonnpenn.pdf
○北区（２０２３年３月）『北区観光振興プラン２０２３』
https://www.city.kita.tokyo.jp/sangyoshinko/bunka/kanko/kanko/kankoshinkoplan2023.html
○甘楽町（２０１３年３月）『織田宗家ゆかりの歴史的水路雄川堰・小堰』
○松本市・松本観光コンベンション協会・新まつもと物語プロジェクト（２０２３年）『まつもとみず巡り』
https://visitmatsumoto.com/wp-content/uploads/2018/11/mizumeguri_map2023.pdf

shig-osm@blue.ocn.ne.jp

水辺の観光まちづくり

1 然別湖ネイチャーセンター（北海道鹿追町）

然別湖と共に
―シーカヤックや自然散策、冬は氷上のイグルーも―



然別湖ネイチャーセンター ● 齋藤 夏月

湖を取り巻く命のつながり

私たちがフィールドとしている然別湖は、北海道中央部に位置する大雪山国立公園、十勝地方に面する南に位置しています。標高804メートル。天然の湖では北海道で最も標高が高い湖です。周囲13・8キロ。かつて山あいを流れる川が造山活動によってせき止められてできた湖なので、入り組んだ形で水深は約100メートル弱あります。

亜寒帯の気候区分になるため、エゾマツ、トドマツ、アカエゾマツといった北海道を代表する針葉樹や、ダケカンバやオガラバナ、ナナカマドといった広葉樹の混じり合う針広混交林の深い森が広がっています。山の中には永久凍土が存在し、その影響でこの標高で見るのは珍しい高山植物も自生しています。

森には北海道ならでは野生生物が数多く暮らし、岩塊地には耳の短いエゾナキウサギも暮らしています。湖にはミヤベイワナという然別湖のみに生息する魚がいます。湖が形成される際に陸封されたオショロコマが進化したものです。その他に多くの淡水魚が生息し、その魚たちを狙って魚食であるオジロワシ、ミサゴ、エゾシマフクロウなどが繁殖しています。

この豊かな自然環境を多くの方に伝えるべく、民間のガイドカンパニーとして1990年に設立されたのが「有限会社 然別湖ネイチャーセンター」です。のちに「株式会社 北海道ネイチャーセンター」と改名。現在も屋号として「然別湖ネイチャーセンター」で活動を続けています。（2024年4月現在、正社員13人）。

自然により近づくために

豊かで北海道らしい環境が広がるこの然別湖の魅力を伝えたい、そのためにはどのようなツールが良いかを考え、森の中ではインタープリテーション（単なる情報提供でなく、背後にある意味や関係を明らかにすること）のガイドを、湖ではカヌディアン・カヌーやシーカヤックを用いることにしました。湖を案内する際に遊覧船のスピードでは見逃してしまいそうな事象を丁寧に観察し、湖の醸し出すゆったりとした時間をより体感したいからです。

カヌーで漕ぎ出すと岸伝いに咲く花を愛で、岸辺に暮らす野鳥を観察し、湖水の透明度が19メートルほどあるのでカヌーの下を悠々と泳ぐ魚たちを見ることもあります。エンジン音がないのとカヌーのスピードが自然の速さであるため、生き物たちとの距離も縮まります。

カヌーを体験される方も、水面までの距離が船やボートよりも近いので普段とは異なった目線から湖に触れ合うことができ、より印象深い機会と



白雲山から望む然別湖

なっているようです。

カヤックはより風の影響を受けにくいので、長距離移動に向いています。湖を横断したり、九つある湾を巡るツアーにと使い分けしています。春から秋にかけて移りゆく季節の変化を、湖側から眺めるツアーは会社設立時からの人気です。

◆◆◆ 冬の湖の楽しみ方

冬は長く、12月に湖面が凍り始め、4月末まで全面結氷をしています。氷の厚さは1㍍ほどにもなり、分厚い氷の上に雪が降り積もると景色は広大な雪原へと変わります。

この閑散期の遊びとして始めたのが氷上でのイグルー（北米先住民イヌイットのドーム型の氷の家）作りです。雪と湖水を使い、万年雪に近い堅牢な氷のブロックを作り、煉瓦積みの要領でドーム型に積み上げていきました。イグルーを作るためには不純物の無い雪と水が大量に必要になります。土などの不純物が混じると、それが陽射しの熱を吸収し、あっという間にイグルーを融かしてしまうからです。そして、制作の際には角度をつけて屋根を積み上げていくため、すぐに凍りつく厳しい寒さが欠かせません。冬の気温はマイナス10℃からマイナス30℃。こういった要素が揃っていました。

町の人と始めたイグルー作り、その制作の中から冷えた身体を温泉で温めたいという事で氷上露天風呂が生まれ、仲間と集まり温泉に入ったらお酒を酌み交わしたいという事で氷のＢＡＲを作り、いつしかこれらが観光客の注目を集めるようになり、１９８２年には冬の観光イベント「しかりべつ湖コタン」としてスタートしました（コタンとはアイヌの言葉で村の意）。

現在では、氷上足湯・セレモニーイグルー（結婚式を挙げるカップルもいます）、自然を紹介するジオイグルー、宿泊体験ができるアイスロッジも加わりました。これらの内装には、湖から切り出した透明な氷を使い、湖が作り出す自然の美しさを観光客に体感してもらっています。

然別湖ネイチャーセンターでは、このイベントの企画にイベントスタート時から携わっています。

◆◆◆ 次へつなげること

会社が設立された当初は、まだ全国の中でも自然ガイドをメインにした会社はありませんでした。自然と人との間に橋渡しとしてガイドが存在する。これは現在も変わらず私共がモットーとしています。図鑑の中、ネット上で見た生き物たちが実際に暮らす場所に自身の手で触れて、見て、体感するのはとても重要です。

然別湖は国立公園法で、開発の出来ない地域です。悠久の時が刻んできた自然環境をこれからも維持していかなければいけないのですが、特定外来生物の存在や気候変動、オーバーユースなど、時代の変化と共にさまざまな問題も抱えるようになりました。一つ一つ解決に向けて取り組んでいますが、気の遠くなるような日々でもあります。

然別湖と共に毎日を過ごしているからこそ伝えられる事があります。ここの自然をきっかけに、人々が環境への眼差しや気づきの変化につなげられたらと願い活動を続けています。



シーカヤックで透明な湖を渡る



全面凍結した氷上のイグルー



然別湖周辺の森

水辺の観光まちづくり

2

一般社団法人
十和田奥入瀬観光機構
（青森県十和田市）

唯一無二の自然景観を生かす
―奥入瀬渓流氷瀑ツアーを事例に―



一般社団法人十和田奥入瀬観光機構
地域マネジメント部長
● 安藤　巖乙

◆◆◆ 歴史ある国立公園の景観保護

現在景勝地として全国にその名を知られる十和田湖・奥入瀬渓流だが、近代になるまでは人跡まばらな地であり、信仰のための巡礼者や鉱山開発のための鉱夫が訪れるのみの場所で、定住者はいなかった。一躍その名を知られるようになるのが、大正から昭和初期にかけ、外国人観光客誘致が政府の重要施策のひとつであった時代。鉄道省の外局として国際観光局（１９３０年～42年）が設置され、国を挙げて全国の景勝地へ送客し、観光地整備に取り組んだ時代だった。国際観光局の事務分掌のひとつには「観光地における風致記念物の保全」があり、外国人観光客を含む観光活用のために景観保護が必要、という考え方に基づいていた。具体の景観保護施策として、十和田湖と奥入瀬渓流は１９２８年に名勝及び天然記念物（当時）となり、次いで１９３６年には八甲田連峰も含む十和田国立公園（当時）として指定された。

◆◆◆ 見る水辺をいかに体験型観光にするか

約1万年前の十和田湖の決壊によって濁流が台地を削って生まれた奥入瀬渓流。その特殊な成り立ちから、渓流とほぼ同じ高さで遊歩道だけでなく国道が平行して走る奥入瀬渓流は、歩かずともドライブで十分楽しめる「見流し型観光」の場所だった。それだけ恵まれている景観を先人が保全し続けてきてくれたことは誇らしい一方、昨今の体験型観光への流れからは取り残されてきた。宿泊や飲食を除けばバスの運賃以上の経済的効果がなく、入退場管理ができない国道のため、マイカーによるドライブであれば「無料」で観光ができてしまう場所であり、秋の紅葉期に観光客が集中し、道路は大渋滞、普段30分足らずで通過できる14キロの渓流区間が2時間を要するなど、オーバーツーリズムとなってきた。一方で、遊歩道が雪に覆われ、道路も雪道となる冬季は、観光客数が落ち込むことが当たり前だった。

◆◆◆ 冬季観光の打開策、奥入瀬渓流氷瀑ツアー

そのような状況に対して、観光行政は常に打開策を求めてきた。例えば、１９９９年からはじまった十和田湖冬物語は、毎年2月に1カ月前後の期間、十和田湖畔で雪を生かしたすべり台や屋台の出店、毎晩の花火の打上を行うイベント。県内周遊のきっかけに十和田湖を訪れてもらうためのロングランイベント、冬季誘客の目玉として現在も継続している。また、冬季の氷瀑景観は地元では知られており、売り出そうという取り組みは過去にもあった。１９９２年からは地元自治体の十和田湖町（当時）が水銀灯による3時間のみのライトアップを実施し、好評を博した一方、渋滞の発生や動植物への影響の懸念から、5年間で取りやめた経緯がある。

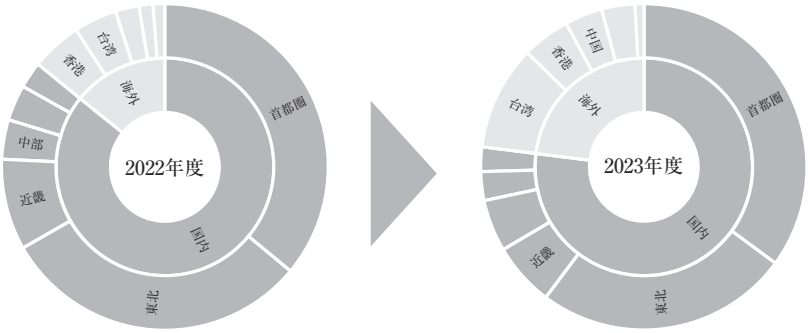
２０１８年1月に開始した奥入瀬渓流氷瀑ツアーは、十和田市の冬季観光充実・強化事業としてはじまった。株式会社三沢奥入瀬観光開発（星野リゾート奥入瀬渓流ホテルの所有経営会社）からの企業版ふるさと納税を財源として活用し、環境に配慮し、熱



冬季観光の目玉としてはじまった氷瀑ナイトツアー

を発しないＬＥＤライトを搭載した車を準備した。ツアーに参加しないとみられない形態をとることで、渋滞を回避しつつ、ライトの照射時間を最低限に抑えて生態系への影響を低減させた。さらに、バス移動の車中ではネイチャーガイドが奥入瀬の自然について解説。「見流し型観光」から、その背後にある自然の成り立ちに触れてもらうことで、景観だけでない「奥入瀬ファン」を創出している。

氷瀑ツアーでは新しい客層を開拓



過去最高実績となった昨年度参加者のうち４分の１は海外から

２０２０年の冬からは、当機構が氷瀑ツアーの運営を委託事業として受託し、第３種旅行業者である強みを生かし、旅行商品としてのブラッシュアップを行っている。７年目を迎えた２０２３年度においても過去最高の参加人数を記録した。

また、地域のインバウンド対応を担うＤＭＯとして、販売サイトの多言語化など、ＦＩＴ（外国人個人旅行者）の取り込みも積極的に行っている。昨年度はコロナ禍が落ち着いたこともあり、参加者の２割以上が海外からの参加者となった。台湾、香港、中国からの参加者が４分の３を占め、中国語でのガイド対応が急務となっている。


バイパス開通後、渓流内を移動する手段のひとつとして検討されているグリーンスローモビリティ

未来の奥入瀬のための取り組み

最後に、奥入瀬渓流における「まるごと自然博物館の実現」の取り組みについて紹介する。現在事業中である奥入瀬渓流を迂回する青撫山（あおぶなやま）バイパスが完成すると、奥入瀬渓流区間は交通規制が行われ、「歩く奥入瀬」の実現と、環境配慮型の良質なモビリティによる代替交通が渓流内を走ることが合意されている（奥入瀬渓流利活用検討委員会「奥入瀬ビジョン」２０１８年６月）。このビジョンの実現に向け、官民一体による「奥入瀬十和田利活用協議会」が２０２３年９月に設立され、本格的な議論が開始したところである。当機構は、協議会の事務局メンバーとして、利用者目線かつ民間視点での事務局運営を期待されている。

同協議会への奥入瀬渓流利活用検討委員会からの提言書には「オールシーズン型滞在型観光」の必要性が提起されており、「人と自然の共存・共生」を実現しつつ、地域が潤うことの必要性が説かれている。


奥入瀬渓流の名所のひとつ、阿修羅の流れ

十和田湖・奥入瀬渓流は、季節に応じて、いや、毎日であっても少しずつ移ろいゆくさまざまな姿を見せてくれる。そしてその姿は、紅葉でも、新緑でも、氷瀑でも、はたまた雪解け期であっても本来優劣はない。ただ写真映えや口コミといった都合で勝手に優劣をつけているのは人間である。水辺という好環境を本来の姿のまま維持しながら、経済的な好影響をどう享受できるか。その本格的な議論はまだ、スタートしたばかりである。

水辺の観光まちづくり

3 佐原おかみさん会（千葉県香取市）

小野川の流れにこころ癒やされて
―佐原おかみさん会と「まちぐるみ博物館」―



佐原おかみさん会会長 ● 平塚 智子

◆◆◆ 小野川とわたし

千葉県佐原に嫁いではや35年。最近では、地域の方に「おたくは婿取りですか」と言われるくらいずうずうしくなじんでいる。嫁いだ先は、創業文化元年（１８０４年）の由緒ある福新呉服店。埼玉県で生まれ商家に縁がない私にとって、古風な地域の老舗暮らしは、なかなかどうして大変だった。

佐原は千葉県の北東に位置し、銚子と成田のちょうど真ん中あたりにある商人の町である。「小江戸」「江戸優（まさ）り」とも言われており、歴史的な町並みのあるところだ。町の中心に小野川が流れ、少し歩くと利根川、付近には国指定重要文化財の香取神宮や観福寺（日本厄除三大師）があり、最近はロケ地としても知られている。かつては水運を利用し、佐原の米、酒、醤油などを江戸へ運び、帰りに江戸の商品を積んで戻ってきたことで栄えたという。

小野川は昔、ふたをして駐車場にする計画もあったと聞いているが、今はすっかり町のシンボルとなり、両岸に植えられた柳を見ながらさっぱ舟に乗る遊覧船の風景がよく知られている。この川の良さは蛇行していて川幅が狭いところ。風を感じながら舟から眺める町の姿も風情がある。

子どもが小さな頃は手をつないで川沿いを歩き、幼稚園までの行き帰りを過ごしていた。初夏には柳に花が咲き、若草色の葉がそよぐ風景は歩いているだけでも心が和んでいく。

◆◆◆ おかみさん会の成り立ち

この町は昔から祭りが盛んで旦那衆中心に物事が決まってきた。そこで発生した「佐原おかみさん会」はちょっと異質だったと思う。立ち上げこそ、観光課からの呼びかけによる「佐原まちぐるみ博物館」を行う補助金事業だったが、終了後は自主的に活動し19年続いてきた。もともと、水運で栄えた佐原は、時代の変化に取り残され、大型の商業施設には太刀打ちできず商店会も以前のように活動していない。「この町を何とかしないといけない」という思いはそれぞれのおかみにあった。しかし、何をしたらよいのかわからない。そこに補助金事業により毎月勉強会があり、横のつながりができた。１年の事業が終わっても続けていこうと若手３人が協力して代表を務めることになった。そして、自主的に集まり、アイデアを出し合い、活動を重ねてきた。その中で守ってきたことがある。それは、「季節感を大切にし、佐原の良さを壊さないこと」だ。

私たちは、店の女主人と趣旨に賛同する女性20人ほどで活動している。また、賛助会員として地域の約30カ所の店舗が参加。主な活動は「佐原まちぐるみ博物館」の運営とにぎわい創出イベントの開催である。

佐原まちぐるみ博物館とはそれぞれの商家にあ



おかみさん会の会員による作業風景

るお宝（先祖代々の道具類や建物、手製の作品、たたずまいなど自慢できるもの）を店内に置き、お客様と会話を楽しむという試みだ。佐原の町全体が博物館である。企画展としてお雛様や五月人形を展示する。そこにいるおかみはお客様に楽しんでいただく「学芸員」ならぬ「楽芸員」である。

◆◆◆ 小野川を活用した活動内容

年間活動は、新春の「佐原・町並み・お正月」と「寿獅子舞」から始まる。小野川周辺をお獅子一行が厄を吸い取りながら練り歩く。

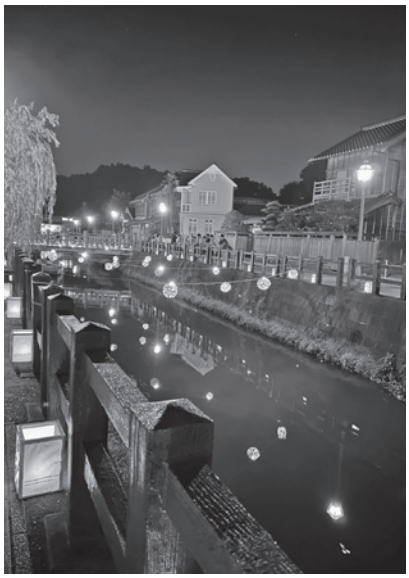
2、3月の「さわら雛めぐり」は各家に伝わるお雛さまを100組以上展示する。協力店舗だけでなく、だし（川へ降りる階段）にお雛様の家を設置して舟からも楽しめる。「さわら雛舟」では、香取神宮の雅楽の演奏で舟を七段飾りのお雛様に見立て本物の十二単のお雛様や稚児さんが乗り優雅に運行する。毎年、稚児さんの希望者が増え、最近では抽選となるほどの人気ぶりだ。

4、5月は「五月人形めぐり」。6月は地元女子高校の茶道部のご協力で、佐原のお菓子とお抹茶を小野川の風景とともにおかみの琴の演奏を聞きながら五感で楽しんでいただく「めぐり茶屋（野点）」。


小野川を進むさわら雛舟（３月）

8月の「さわら・町並み・夕涼み」は、ゆかたで楽しむ灯りと音というテーマで行い、今年20回目となる。活動を始めたころ、1日の仕事を終え、夜な夜な集まって相談を重ねていた。会員の店に行く際、小野川沿いを通り「こんなに素敵なのに人がいない。どうしたら夜の佐原に人が来るようになるだろう」そんな思いからこのイベントがはじまった。佐原の魅力をもっと知ってもらうには…。何をすればお客様に喜んでもらえるか…。そうして私たちはさまざまな挑戦をしていった。

約600本のガラス瓶にろうそくを入れ、色紙で巻き小野川沿いに設置したり、大きな竹灯りを護岸に設置し水面に映したり、竹の毬に灯りを入れ小野川に吊るしたりとライトアップにも工夫を凝らした。メインイベントの「夢灯ろう流し」は、舟から願いごとを書いた灯ろうを自分で流すことができる。スタッフも浴衣を着て参加し、小野川をステージとし、佐原囃子、三味線、弦楽四重奏、篠笛などの演奏も行った。

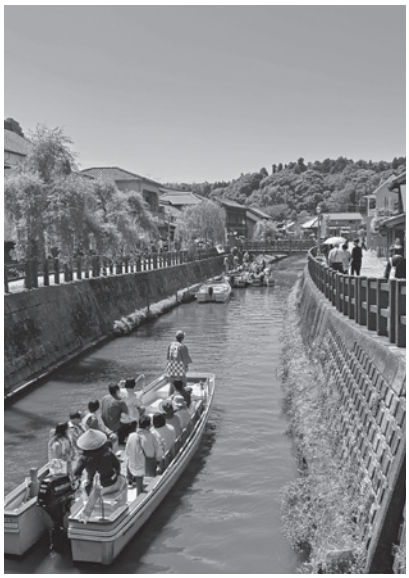

さわら・町並み・夕涼み（８月）

◆◆◆ 今後の活動と想い

佐原おかみさん会の会員は20人程度だが、中心で運営しているのは数人、その時により参加できる会員と地域の皆さまたちが活動を支える。改めて一緒に活動してくれた協力団体、おじさまや若者たち、おかみたちとその仲間に感謝。それも、同じ思いの同志がいたからできたこと。これからはこの活動を次世代へ引き継いでいただく予定だ。地域に生まれ育った子どもたちがイベントに参加し、小野川のすてきな風景を目に焼き付けてもらい、また戻ってきてくれることも願っている。

そして、今後も町にいらしていただいたお客さまに楽しい旅の思い出を少しでも感じていただけるよう自分の店を守りつつ心からおもてなしをしていこうと考えている。

さあ、あなたも佐原で時を巻き戻して癒やしのひとときを感じてみませんか。


小野川の風景

水辺の観光まちづくり

4 NPO法人ORGAN（岐阜県岐阜市）

観光まちづくりで持続可能な好循環を
―長良川流域文化を次世代につなげる―



NPO法人ORGAN理事長 ● 蒲 勇介

現在も私たちの暮らしに欠かせない長良川ですが、かつては、物流という役割も担っていました。上流域の特産である和紙や材木を舟やいかだで運び、現在の岐阜市で荷下ろしされ、工芸品へと加工されました。物流が陸路となった今も岐阜市は和傘・提灯ともに日本一の生産量を誇り、伝統的工芸品に認定されています。

行政区画ではなく、長良川流域をひとつのエリアとして地域づくりをしていくことで、流域の文化を未来へつなげていけるのではないかと考え、2011年にORGANを立ち上げ、長良川温泉泊覧会（長良川おんぱく）をはじめました。

◆◆◆ 長良川に魅せられて

20代前半からまちづくりに携わり、20年ほどになります。大学時代を福岡で過ごし、岐阜にUターンして最初に参画したNPOでは岐阜に暮らす同世代の若者にこのまちの魅力に気づいてほしい、という思いでフリーペーパーの発行を始めました。

「岐阜にはなにもない」

当時、そんな言葉をよく耳にしましたが、取材をしていくうちに出会うプロダクトや人々はとても魅力的でした。そのひとつが岐阜の伝統工芸品「水うちわ」です。そして、岐阜の文化の源は長良川にあると気づいていきます。

観光まちづくりに取り組むNPO法人ORGANが拠点としているのは鵜飼や岐阜城で知られる岐阜市。街の中心部に清流長良川が流れる風光明媚な都市です。



透き通るように美しい水うちわ



岐阜和傘

◆◆◆ 長良川おんぱく

「オンパク」とは、小さな体験型プログラムを開催したい個人や団体（パートナー）を集め、内容の磨き上げを行ない、期間を限定して地域内外から参加者を呼び込み実施するというものです。パートナーは地域内で広く募集し、それぞれご自身のプログラムを実施していただきます。「地域資源の発掘」や「人材の育成と連携」を育む手法として、別府を皮切りにこれまで全国50カ所を超える地域で実施されてきました。長良川おんぱくは2011年から2020年の10年間にわたり毎年開催し、1年間でおよそ120のプログラムを実施。10年間で地域内外から延べ3万1194人のご参加がありました。プログラム造成で大切にしていただいたことは「長良川らしさ、この地域らしさ」を感じられるプログラムであることです。

◆◆◆ 流域文化の担い手たちとともに

長良川おんぱくで開催したプログラムは多様なジャンルにわたりますが、長良川を五感で感じられる川漁師によるプログラムは、この土地ならではの内容でした。川風を感じながら実際に漁で使う舟に乗ったあとに、川の恵みあふれる食事をいただく。普段はなかなか体験できない川の暮らしに触れ、川漁師さんから直接お話が聞けることも

醍醐味です。そして、芸舞妓・幇間（ほうかん）のもてなしと鵜飼観覧を存分に楽しむ船遊びも長良川でしかできない特別な体験です。長良川おんぱくを始めて数年たつと、おんぱくを機に起業をする人が現れたり、パートナー同士のコラボレーションが生まれたりと地域にインパクトを与えることができたと思っています。

◆◆◆ 文化継承の一手、長良川デパート

長良川おんぱくを始めて5年がたった2016年に、事務所を現在の場所に移転しました。岐阜城・金華山のふもとで町家が軒を連ねる通称川原町と呼ばれるエリアです。初夏から秋にかけては長良川鵜飼の観覧船に乗るお客様でとてもにぎわいます。この移転を機に、町家の手前を店舗、奥を事務所にして、長良川ならではの商品を販売する「長良川デパート」を開業しました。長良川デパートで販売する品は、長良川流域で作られたものや、長良川の魅力を伝える商品ばかり。さらに2021年には改修工事を行い、開業時の3・5倍ほどに増床しました。このように小売店を展開するのは、長良川流域文化を次世代に継承するための一手として市場を形成していきたいという思いがあります。すばらしい手仕事によって作られる商品も、ほしいと思う人の目に留まらなければ購入に至りません。購入されなければ職人は収入が得られず、生業として成立しなくなります。そのような状況では当然後継者を育成することもできず、産業として衰退し、いずれ文化が消えていきます。この悪循環を好循環に転換するため、観光でお越しの方や地元のお客様へ商品を届けています。



漁師と舟から漁を見学する参加者



長良川の船上で行われる船遊び



長良川デパート

◆◆◆ 流域文化レッドデータブックの発行

約20年の活動の中で、長良川流域文化の魅力を実感してきた一方で、たくさんの課題があることも見えてきました。岐阜和傘の部品製造を担う職人が1人であること、長良川の魚食文化を支える川漁師の高齢化などの現状を改めて一冊にまとめたのが「長良川流域文化レッドデータブック」です。工芸・漁業・芸能の3分野の情報を定量的データと担い手へのヒアリングをもとにまとめています。さらに、編集メンバーで「長良川流域文化の産業構造図」を作成しました。今回調査した3分野の原材料・道具類・担い手（職人）の危機度とつながりをビジュアル化すると、それぞれの産業が長良川を中心に密接に絡みあっていることがよくわかりました。つまり、一つの技術や一つの原材料が失われることは、他の産業にも波及していくということです。長良川流域文化レッドデータブックの全ページはWEB上でも公開していますので、ぜひご覧ください（左上2次元バーコード）。

長良川流域文化レッドデータブックの2次元バーコード

◆◆◆ これからの長良川流域文化のために

NPO法人設立、そして長良川おんぱく開始から13年。多岐にわたる活動をしてきましたが、根底にあるものは変わりません。誇りに思う長良川流域の文化を次世代につなげていくため、今年度はこれまで以上に発信し、持続可能なビジネス化を図る年にしたいと考えています。5月11日から10月15日の長良川では毎日鵜飼が開催されます。観覧船に乗り舞妓さんのもてなしを堪能し、織田信長も愛した幻想的な鵜飼をぜひお楽しみいただければと思います。

5

公益財団法人
松江市観光振興公社
（島根県松江市）

歴史と未来を感じる堀川遊覧船

―国宝松江城を囲む3・7キロをめぐる―



公益財団法人
松江市観光振興公社営業企画係
● 足立　薫平

◆◆◆ ちょっと変わった遊覧船

島根県松江市にある堀川遊覧船は、国宝松江城を囲むお堀約3・7キロを約50分かけて1周する観光遊覧船です。運航するお堀は約400年前から残っており、歴史情緒残る松江ならではの遊覧が堪能できます。

堀川遊覧船の特徴は大きく三つあります。一つ目は、「屋根下げ」です。1周する間に四つの低い橋をくぐりますが、通常の状態では通過できないため、屋根を下げて通過します。身をかがめて通過することでアトラクション性も加わり、年代問わず人気があります。二つ目は、1周する間に見ることができる「さまざまな松江の姿」です。緑生い茂る松江城山の木々をくぐり抜け、松江市街を通り、塩見縄手と呼ばれる江戸時代から残る町並みを船から眺めることができ、常に変化を楽しむことができます。三つ目は、個性豊かな「船頭さん」です。船頭さんの多くは、定年退職後第二の人生としての就労者で、元校長先生、元白バイ隊員、元医療関係者、元県庁職員、語学堪能な船頭さんなどさまざまな経歴を持った方が集まっています。

このようにユニークな特徴を持っている堀川遊覧船は、旅行新聞新社が毎年発表する「プロが選ぶ水上観光船30選」で、2024年は西日本トップとなる4位に選出されました。

◆◆◆ 約400年の時を経て残る奇跡

前述の通り、松江には国宝松江城の周りに現在でも多くのお堀が残っています。県庁所在地の中心地でありながら、約400年間守られたことは奇跡に近いのではないでしょうか。しかし、このお堀をめぐっては紆余曲折がありました。

お堀がつくられたのは、1607年に戦国武将、堀尾吉晴が城地を松江に定めて築城工事を始めたことがきっかけです。築城当時のお堀は防衛の役割を果たしていましたが、城下町が整備されていくにつれ、物資の輸送、水上交通、生活用水として活用され、住民の生活に密着していきました。時代が移り、お堀は堀川として市民に親しまれ、昭和初期までの堀川は白魚が泳ぎ、遊泳もできるほど、きれいな川でした。しかし、鉄道や車などの陸上交通の発達とともに、水上交通は衰退し、道路や宅地用地としての一部埋め立てにより川幅は狭くなり、流れが悪くなりました。生活用水としての需要を失い、生活排水の流入やごみの投棄により、汚濁が進んでいきました。

そんな中、1970年代頃になると堀川の現状に危機感を抱き、以前のような堀川を取り戻したいという市民の思いが高まり、堀川再生の取り組みが動き始めます。行政は、ポンプ場の整備により、宍道湖の水を堀川へ導水し、下水道工事も行いました。市民の間でもボランティアによる清掃が活発に行われるようになったことで、少しずつ浄化され、堀川はよみがえっていきました。

◆◆◆ 堀川遊覧船のはじまり

1980年には、松江青年会議所のメンバーにより「よみがえる堀川の会」が発足し、堀川の価値や可能性を見いだしアピールすると同時に、観光資源としての堀川の有効活用を松江市に提案しました。

1981年にはよみがえる堀川の会による貸しボートの取り組みが始まり、その後もさまざまなイベントの開催を経て、1996年4月、当時の松江市長が堀川遊覧船の就航を発表しました。そ

して、１９９７年7月20日に堀川遊覧船が運航開始となったのです。

◆◆◆ 直面している課題とは

近年多くの業界で「人材不足」が課題となっていますが、堀川遊覧船も例外ではありません。定年年齢が引き上げられ、再雇用も広まっていることで、第二の人生（職場）としての採用は容易ではなくなっており、大規模な団体客の受け入れが難しくなってきているのが現状です。

これからの時代は、限られた人数の中で効率よく運営していくことが重要です。コロナ禍も落ち着きを見せ、本格的に「観光」が動き出した今、現在の船頭さんの人数で効率的に運航していく必要があります。そこで、堀川遊覧船ではコロナ禍で休止していた定期便を復活させ、運航時刻の可視化を行いました。運航時刻を確定することによりシーズン毎の適正な配船が可能になるうえ、お客様も乗船時刻を把握して、待ち時間によっては松江城周辺エリアの散策が可能となります。同時に団体予約枠の整理も行い、効率よく多くのお客様をご案内できるものへと変更し、課題解決に向けて動き始めています。



国宝松江城を囲むお堀約３・７キロを約 50 分かけて一周する

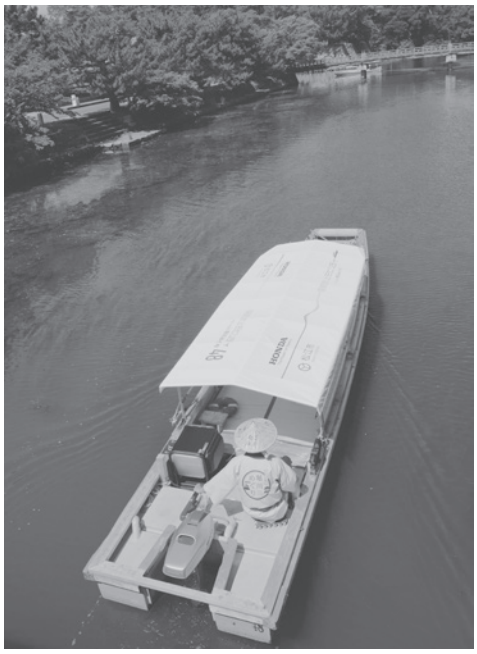
◆◆◆ 未来への展望

また、企業と連携した取り組みも行っています。現在、本田技研工業株式会社（以下「Ｈｏｎｄａ社」）と、堀川遊覧船をフィールドとした小型船舶電動推進機の実証実験を行っています。これは、Ｈｏｎｄａ社と松江市が掲げるカーボンニュートラル（脱炭素）実現に向けた取り組みで、実証実験を実施する最適な場所として堀川遊覧船を選定いただいたことがきっかけです。

電動推進機プロトタイプのテスト走行や試乗会を重ね、２０２４年４月から定期便として一日数便で運航を開始しております。現在、Ｈｏｎｄａ社の電動推進機に乗船できるのは世界で唯一堀川遊覧船だけです。

電動推進機はエンジンに比べて、低騒音・低振動なので野鳥の鳴き声、波の音、街の音が鮮明に聴こえ快適な遊覧ができるうえ、操船する船頭さんとお客様が双方向にコミュニケーションが取れるようになりました。また、排気ガスの匂いもなく、二酸化炭素の排出もしないため、非常にクリーンな乗り物です。近年では海外を中心にカーボンニュートラルツーリズムが注目され始め、選ばれる観光の一つの要素になってきています。

最新テクノロジーと脱炭素社会の実現に向けたカーボンニュートラルツーリズムを体験できる堀川遊覧船を皆様に提供していきたいと考えています。



Honda 社の電動推進機が定期運航する実証実験



一時は汚濁が進んだ時期も



始まった頃の堀川遊覧船

水辺の観光まちづくり

6 愛媛県愛南町

海辺の絶景を走って巡る
―愛南マラニックで観光まちづくり―



愛南食のイベント実行委員会事務局
愛南町商工観光課課長補佐
● 蓮田　修平

◆◆◆ マラソンとピクニックが合体 マラニックとの出会い

2022年3月、例年5月に愛南町で行っている食のイベント「ぎゅぎゅっと愛南！　夏の陣～海と山を喰らう～」が新型コロナの影響で中止となりました。代わりに何か事業ができないか検討していた中、観光セミナーで紹介されていたのが、マラニックでした。マラニックとは、マラソンとピクニックを合体させた造語で、タイムを競うマラソン大会とは違って、走りながらピクニック、つまり景色や食事をゆっくりと楽しむことを取り入れたランニングイベントです。コロナ禍でも実施できる観光イベントとして初回限定のつもりで開催しましたが、思わぬ好評だったため続けて開催し、今年で3回目を迎えることができました。

2023年大会の概要は次の通りです。

「愛南マラニック～食と海と太陽と～2023」
①開催日…2023年8月27日（日）
②距離…53・0km
③制限時間…9時間（朝7時スタート）
④当日出走者…452人（1都22府県からエントリー）
⑤制限時間内完踏者…374人（完踏率82・7％）
⑥参加費…1万円

◆◆◆ リアス海岸の絶景を巡り 特産品や郷土料理を味わう

コースマップを見ていただくと分かるとおり、コースのほとんどが海沿いであり、ランナーはリアス海岸が形成する風光明媚な景観を眺めながら走ります。特に、台風や季節風から家や暮らしを守るため整然と積み上げられた石垣が美しい外泊地区「石垣の里」や、天気が良ければはるか九州まで見渡せる「高茂岬」といった景観地を隅々まで巡るコース設定とし、ランナーには愛南町の自然や文化を肌で体感していただきます。

マラニックは食を楽しむといった面で、実施主体が『愛南食のイベント実行委員会』（実行委員会）であることは大きな利点でした。通常は食のイベントを実施しているわけですから、エイドステーション（AS）で参加者に振る舞う食べ物・飲み物で、特産品や地元郷土料理など愛南町ならではのものを美味しく味わってもらえる自信がありました。

実行委員会は、愛南漁協、えひめ南農協、愛南町商工会などの地元団体で構成されていますが、愛南マラニックではその構成団体に直接ASを担当していただきました。ASでは、愛媛県が全国一位で、うち愛南町が約三割を占める養殖マダイを使った丼やひや汁（さつま飯）、愛南町が生産量日本一を誇る河内晩柑「愛南ゴールド」を使用



愛南町最大の絶景ポイント・高茂岬を巡るランナーたち

したジュース・かき氷・シャーベットのほか生甘酒を提供しました。また、参加賞も特産品のセットを採用しました。

滞在型観光へ転換する産学官共創の取り組み

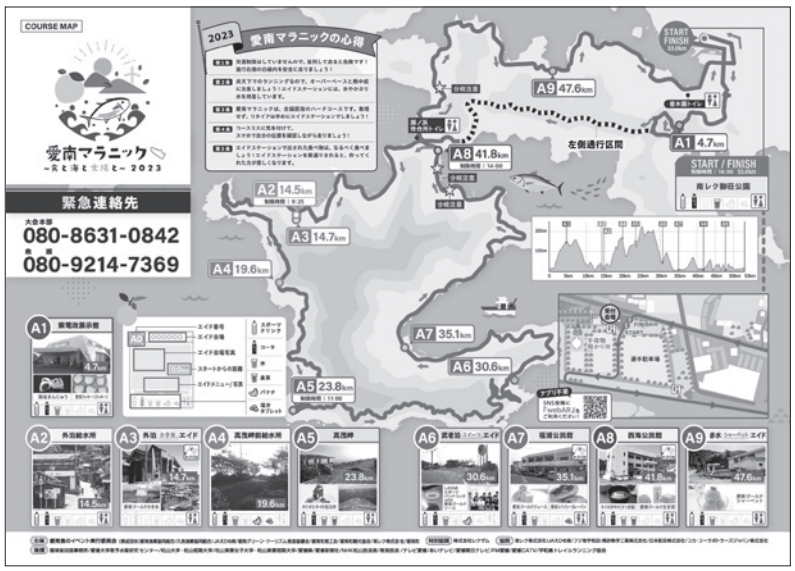
愛南マラニックは、愛南町の観光の課題を逆にメリットに変えています。愛南町の観光スポットは町内に点在しているため、そもそも町内からでも観光スポットまで行くことが大変です。そのため、例えば、大型バスで来町し、町内で少し観光してから道の駅で休憩・買い物して帰っていくなど、愛南町の観光の課題は、通過型観光となってしまっていることでした。愛南マラニックでは、点在している各観光スポットを線で結んで53キロのコースとして設定し、加えて特産品もＡＳで堪能できることにより、走って愛南町をまるごと観光できるようにしました。朝7時から夕方までの丸一日を愛南町で過ごすことになり、多数の参加者に大会前日、そして当日に愛南町に宿泊していただきました。

地域の活性化を図るためには、地元の人間のみならず、外部の「よそ者」の力も必要であると言われます。愛南マラニックでは、愛媛大学、松山大学・松山短期大学、東雲女子大学・松山東雲短期大学の教員や学生の皆さんにボランティアスタッフとして参加いただいています。スポーツマネジメントを学んでいる学生の参加や実際にエイド食を開発いただくなど各大学との連携を深めています。

また、企業との連携では、協賛企業である高砂熱学工業の社員の皆さんに、ゴール後のおもてなしブースを設置していただきました。真夏の大会ということもあり、ゴール後のランナーのクールダウンで何かできないか困っていたところ、高砂熱学工業から、「製氷機で魚を冷やすシャーベットアイスを作っているが、それでランナーの脚を冷やしてはどうか」と提案され、実現に至りました。このように、愛南マラニックは、大学や企業の力を借りてイベントを共に創り上げたことが特徴です。

愛南マラニック通じて交流人口増へ

愛南町では、「なんちゃないけど日本一訪ねたい町」をキャッチフレーズに交流人口の増加を目指しています。参加者からは、「想像以上に美しい景色でした」「食べ物はおいしく、応援も温かい」「愛南町の産業、文化、人々、自然、さまざまな良さを感じた」などといった多数の好評の声をいただきました。参加者の中には、愛南マラニックをきっかけに愛南町を知って、再度ゆっくり観光で訪れていただいた方もいます。今後、愛南マラニックへの参加や多様な主体との運営を通じて、愛南町のなんちゃない魅力に気付き、そこから愛着を持って再度愛南町に関わっていただく、そんな関係人口への発展とその増加を図っていきたいと思います。



愛南マラニック～食と海と太陽と～2023 コースマップ


外泊地区「石垣の里」を駆け上がるランナーたち


日本で唯一現存する紫電改の展示館もコースの一部

水辺の観光まちづくり

7

一般社団法人
土佐町スポーツコミッション
（高知県土佐町）

さめうらダム湖から広がるまちづくり
―スポーツ×観光×地域振興―



一般社団法人土佐町スポーツコミッション
専務理事 事務局長
● 古賀 智志

◆◆◆ 四国の水がめ 西日本最大規模の早明浦ダム

四国のほぼ真ん中に位置する高知県土佐町は「四国の水がめ」として知られる西日本で最大規模の早明浦（さめうら）ダムを有しています。１９７３年のダム完成以降、四国４県に分水され多くの人々の暮らしや産業を支えてきました。そのダム湖である「さめうら湖」の周辺では、近年、より多くの人々に湖とその周辺の雄大な自然を体験してもらおうとスポーツ・アウトドアアクティビティの取り組みが活発に進められています。ここでは、土佐町と私たち土佐町スポーツコミッションが展開するさめうら湖から広がる町づくりについてお伝えします。

人口約３５００人の土佐町は、全国の中山間地域と同様に人口減少や過疎化、高齢化などの課題を抱えながらも、毎年多くの人が移住しさまざまな活動を展開しています。そのような中、ながらく地域にとって近くて遠い存在だったさめうら湖を地域の独自資産、貴重な観光資源として活用しようという機運が高まり、２０１８年さめうら湖周辺整備基本計画がとりまとめられ今に至る取り組みが本格スタートしました。とはいえ、治水と利水が本来の役割であるダム湖の多目的利用にはさまざまなハードルがありました。土佐町をはじめ近隣自治体、消防署や警察署など地元のさまざまな組織、湖面を管理する独立行政法人水資源機構、ダムそのものの管理者である国土交通省など、あらゆる皆さんの努力で今の私たちの活動が支えられています。

◆◆◆ 湖水上のレジャーとスポーツ カヌーやSUPを楽しめるまち

さめうら湖は、その規模と周辺環境の特性から広大かつ静かで穏やかな湖面がひろがっていることが最大の特徴です。土佐町は当時、基本整備計画を進めるにあたり、そのメリットを最大限享受できるものとしてカヌーに着目し、競技スポーツとレジャーの両面での事業に挑戦します。

日本カヌー連盟の協力のもと、カヌー競技で元世界選手権金メダリストであるハンガリー出身のジョコシュ・ラヨシュ氏を指導者として招聘（しょうへい）、地域の小学生から高校生までを指導する「さめうらカヌーアカデミー」というクラブチームを立ち上げました。現在では、インターハイで上位成績を収めるジュニアＴＯＰレベルの選手が育つなど、着実に成果をあげています。

また、地域内外のより幅広い人々を対象にしたツーリズムとしては、湖のガイドツアーを柱に据えました。「雄大で美しい湖とそこから広がる風景、自然と一体化して家族や仲間とリラックスしながら安心してアクティビティを楽しめる場所」というキャッチコピーのもと、年間１０００人規模の人々がレジャーカヌーやＳＵＰを体験しています。



地域のカヌー競技クラブ「さめうらカヌーアカデミー」

3施設を融合させた「湖の駅さめうらレイクタウン」

本整備基本計画の特徴は、三つの隣接した施設を融合し独自の価値を提供する「湖の駅さめうらレイクタウン」として全体をデザインしたことです。計画の核となるその三つの施設を順番にご紹介してまいりましょう。

一つ目は、かつて研修合宿などを中心に受け入れていた「土佐町青少年等の家 さめうら荘」をリニューアルした「さめうら荘レイクサイドホテル」です。２０１８年12月オープン、「窓のむこうには、さめうら湖」のタイトル通り全室レイクビューとなっており、広大な湖面を望むことができます。また、屋外テラス付きのガラス張りレストランでは、土佐町が誇る土佐あかうしのステーキや早明浦ダムを模したダムカレーなど、地元食材を使用したメニューが人気を博しています。

二つ目はスポーツと観光さらには地域住民の活用も包含したユニークな施設、さめうらカヌーテラスです。２０２０年9月竣工、施設内には冬でも競技カヌーのトレーニングができるハンガリー式パドルプール、アスリートや地域住民のためのトレーニングジム、レジャーカヌーやSUP体験、サイクリングなどで立ち寄った観光客や地域の人々がゆったりとくつろげるカフェなどを併設しており、年間1万数千人が訪れています。

三つ目が地域に長年愛されてきた「さめうら森林公園」をリニューアルした「さめうらテントパーク」です。２０２２年4月にトライアルオープン、同年7月に本格稼働し年間１０００人を超えるキャンパーが訪れます。今後数年で段階的な拡充工事が控えており、さらに多くのお客様に満足していただけるよう準備をすすめているところです。



さめうら湖みずうみ開きイベントでのカヌー体験（2024年４月）



さめうらカヌーテラス



さめうらテントパークからの眺め

土佐町スポーツコミッション その役割と新たな挑戦

私たち土佐町スポーツコミッションは、土佐町が手掛けたこれらの取り組みを効果的・効率的に運営し持続的に発展させていく目的で２０２１年4月に設立されました。具体的には、湖の駅の中の「さめうらカヌーテラス」と「さめうらテントパーク」の二つの施設の指定管理を中核財源に関連事業を推進しています。

土佐町は２０２３年10月にスポーツと健康を通じたまちづくりをテーマにしたスポーツ庁の企画である「スポまち！長官賞２０２３」を高知県で初めて受賞しました。湖の駅さめうらレイクタウンを核とした内容で、土佐町スポーツコミッションはその推進役を担います。２０２４年4月からスタートした2年間のプロジェクトの主な目標は、①さめうら湖を競技カヌー振興の全国的拠点として確立②スポーツ・アウトドアツーリズムの包括事業化③多くの地域住民に貢献するスポーツウェルネス事業の立ち上げ―の三つです。設立から3年、草創期の課題を乗り越え地域の期待に応えられるよう、これらの目標に果敢に取り組んでまいります。是非、土佐町にお越し下さい。お待ちしています。

水辺の観光まちづくり

8 長崎県島原市

名水百選に選定された湧水のまち
―水への感謝とまちづくり―



島原市商工観光部しまばら観光課
観光・ジオパーク班主査
● 吉田　将尚

◆◆◆ 水の都と呼ばれるまち

島原は古くから水の都と呼ばれ、市内いたるところから水が湧き、水路には清く澄んだ湧水が流れています。市内には約70カ所の湧水ポイントがあり、町全体の湧水量は1日になんと約20万トンにも達します。また市内には5カ所の飲泉所があり、市内外を問わず毎日たくさんの人が気軽に水をくみに訪れています。自然に与えられたこの豊富な水資源は、生活用水や農産物などだけではなく、温泉となって湧き出るなど、多大な恩恵をもたらすとともに、「水の都」を支える貴重な観光資源となっています。

また、昭和60年に環境庁から「島原湧水群」が日本名水百選に選定され、平成7年には国土庁から「水の郷」に指定されました。この各所の湧水は約230年前の普賢岳の火山活動による眉山（まゆやま）の大崩壊とともに、このときの大地変で地割れが生じて湧き出したといわれています。現在では、市民にとって生活の一部のような親しみのある資源となっています。本市には湧水に因んだ観光名所がありますが、その中からいくつかの歴史などの紹介や、本市の水にまつわるイベントなどについてご紹介いたします。

◆◆◆ 武家屋敷

本市のシンボルである島原城の近くには武家屋敷があります。この武家屋敷は、島原城の城主であった松倉重政が島原城を築いた時、下級武士団をまとめて住まわせるために造ったものです。長さ約400メートルの屋敷町で足軽・鉄砲組が住んでいたところから「鉄砲町」とも呼ばれていました。この屋敷街に流れる水路は当時、飲料水としても利用されており、「御触類集（おふれるいじゅう）」文化2年（1805年）によると、「鍋、釜を洗うと没収、水を汚すと罰金等」と記されており、水奉行を置くなどして川筋の清潔保持に努めていたことがわかります。現在でも地域住民と協力して清掃活動を行うなど維持管理を行っています。

◆◆◆ 鯉の泳ぐまち

本市には湧き水が流れる清流に色鮮やかな鯉が泳いでいるエリアがあります。飲料水や生活用水として大切に利用されていた清流は昭和50年、道路整備などに伴い、コンクリートの溝となり蓋をされて消えるのを憂えた市民の一人が、鯉を泳がせて自然の流れを守る提案をしました。当時は水路に鯉を放流することなどは全国に前例がなく、反対意見も一部ありましたが、地元住民が主体となり、水路を生かしたまちづくりと子どもたちの豊かな心を育むため、鯉を放流することができました。しかし、環境に合わなかったり、病気になったりして死んでしまう鯉もいることから、鯉の死を痛む声が寄せられたため、昭和56年5月5日からは、鯉の供養も行われるようになりました。それ以降、毎年5月5日は鯉の供養と放流を行い、多くの子どもたちが鯉の放流体験をおこなっています。



今も残る武家屋敷街の水路

浜の川湧水と銀水

寛政４年（１７９２年）眉山大崩壊の際に海岸まで土砂が流出し、海岸線が沖の方に前進したことから、漁民がこの地に集落をつくりました。その際に生活用水を確保するため井戸を掘ったところ清水が湧き出し、現在の浜の川湧水と呼ばれるようになりました。この湧水は日量４００トンもあり、海岸に近いのですが塩分を含んでいないため、飲料水としても使われています。また地域住民の知恵で飲料用、洗い物用、洗濯物用と、目的別に区切られており、共同使用の場所を決めて使われています。また、浜の川湧水の隣には「銀水」というお店があります。こちらでは、小さな団子を「島原の湧水」で冷やして特製の蜜をかけた島原のスイーツ「かんざらし」を販売しています。



島原湧水をくむ人たち


浜の川湧水と銀水


鯉の泳ぐまち

島原水まつり

本市には、年間にさまざまなイベントが開催されていますが、水に関するお祭りとして島原水まつりがあります。島原水まつりは、島原ライオンズクラブが白土湖（しらちこ）に噴水を寄贈したことを記念し、水に感謝するお祭りとして地域住民に理解をいただき、昭和62年に第1回が開催されました。当時は竹灯籠を水にまつわる場所である武家屋敷や浜の川湧水などに置いて「感謝」と「水との共生」を感じる日としていました。現在は、メインオブジェである番傘オブジェを中心に、歴史パネルなどの展示を行っており、市内外を問わず多くの方が訪れる夏の風物詩の一つです。


島原の湧水で冷やしたスイーツ「かんざらし」

今後の観光について

本市は、湧水に恵まれたまちであり、見どころが一定のエリアに点在していることから、ゆっくり巡る癒やしの時間の提供に力をいれております。市役所の近くには観光案内所があり、ボランティアガイドが市内の案内を行っています。また、令和４年度からは日曜日限定でワンコインガイドを開始しており、観光客が気軽にガイドを依頼することができます。ガイドと一緒に歩くことで、より島原の歴史や魅力を伝えることができるとともに、観光の満足度を味わうことができます。令和６年に本市のシンボルである島原城が築城４００年を迎えました。本市にとってお城と湧水は大切な観光資源となっています。多くの皆様に訪れていただけるよう、さらなる魅力の向上に取り組んでいきます。

こどもが好きな海の遊びは？
―こども家庭庁と国土交通省が調査―

こども家庭庁と国土交通省は、海での遊びの経験や、海でやってみたい遊びについてこどもや若者に聞いた「こども若者★いけんぷらす　海遊びのこと」の結果をまとめた。それによると、「やってみたい海のレジャー」は「水上オートバイに乗る」や「ダイビング」などが多く、「乗ってみたい船」では「クルーズ客船」が最も多かった。

「こども若者★いけんぷらす」は、国がこどもや若者の意見を広く聴き、制度や政策に反映できるようにするのが狙い。こども家庭庁や各省庁がテーマを設定してこどもや若者（ぷらすメンバー＝小学校1年生～20代の若者で登録した者）の意見を聞くほか、こどもが選んだテーマについて意見を伝えることもできる。

水上バイクやダイビングに興味

まず、海で遊んだ経験や、一番楽しかった海遊びについて聞いた設問。「海でどのように遊んだことがあるか」（複数回答）には▽「水に触る、水に浮かぶ」85・2％▽「砂遊びをする」79・5％▽「砂浜や海岸で海をながめる」78・1％▽「泳ぐ、ゴーグルなどをつけて海の中を見る（シュノーケリングを含む）」66・2％▽「磯や砂浜で生き物をさがす」62・9％―が6割を超えた。

一方で、「海で遊んだことはない」との回答も4・8％あった。

「海遊びで一番楽しかったもの」（単数回答）は▽「泳ぐ、ゴーグルなどをつけて海の中を見る（シュノーケリングを含む）」22・9％▽「砂浜や海岸で海をながめる」20・5％▽「水に触る、水に浮かぶ」15・7％―などが比較的多い。

「その他」には「貝殻拾い」「キャンプ」「バーベキュー」「ボディボード」などがあるが、現状では、一般的な〝海水浴〟以外の遊び、レジャーを経験する子どもはさほど多くないと考えてよさそうだ。

図1は「やってみたい」海のレジャーを聞いた結果（複数回答）。多い順に▽「水上オートバイ（水上バイク）に乗る」34・8％▽「ダイビング」33・8％▽「釣り」29・5％▽サーフィン28・1％▽「SUP」26・2％▽「カヌー・カヤック」26・2％▽「水上オートバイ（水上バイク）を運転する」24・3％―などとなった。

これまでに乗ったことのある船について聞いたところ（複数回答）、▽「遊覧船」57・6％▽「フェリー」（55・7％）▽「人力ボート（手こぎ、足こぎなど）」41・4％▽「高速船」24・8％▽「クルーズ客船」16・7％▽「漁船」12・4％▽「ヨット」8・6▽「プレジャーボート」6・7％―など。

船に乗るならクルーズ船

乗ってみたい船について聞いた結果が図2（複数回答）。「クルーズ船」が最も多く65・7％が「乗ってみたい」と回答しており、続いて▽「漁船」31・4％▽「ヨット」30・5％▽「フェリー」25・7％▽「高速船」21・9％―などの順となった。「漁船」というと、漁業に携わる本格的な船が思い浮かぶが、ここではいわゆる釣り船がイメージされているのかもしれない。

今回の調査では、こども・若者がどのようなSNSを使っているかについても聞いている（複数回答）。結果は多い順に▽LINE 81・0％▽YouTube 76・7％▽Instagram 54・8％▽X（旧Twitter）51・4％▽TikTok 20・0％▽Facebook 18・6％▽Threads 10・5％―など。

調査は2023年9月～10月にWebアンケートを実施。210人から回答があった。

回答者の内訳は、男性36・7％、女性57・1％。年齢内訳は▽「6～9歳」8・1％▽「10～12歳」16・2％▽「13～15歳」20・5％▽「16～18歳」19・5％▽「19～22歳」14・3％▽「23歳以上」21・4％。

居住地別では▽北海道・東北11・9％▽関東41・0％▽中部15・2％▽近畿16・2％▽中国4・8％▽四国1・9％▽九州8・6％―となっている。

（地域創生・情報広報グループ）

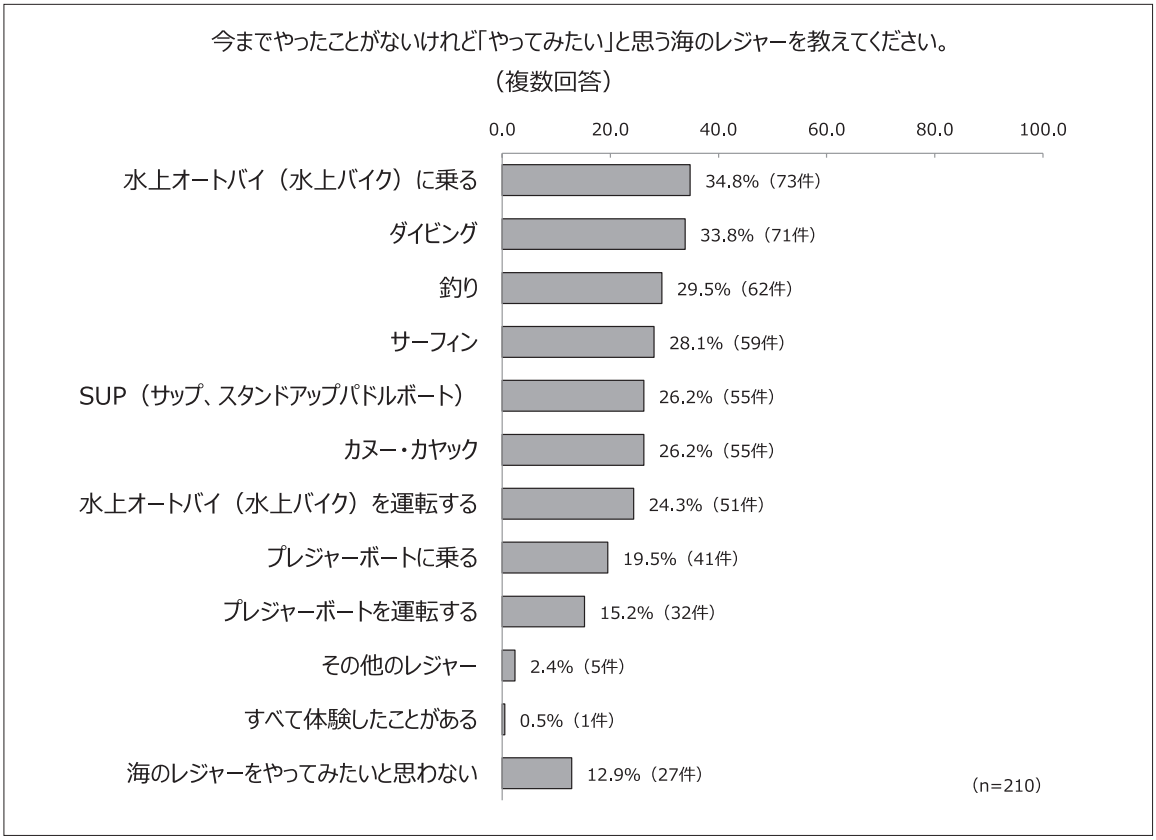


図１

（出典：こども家庭庁 HP 掲載資料より）

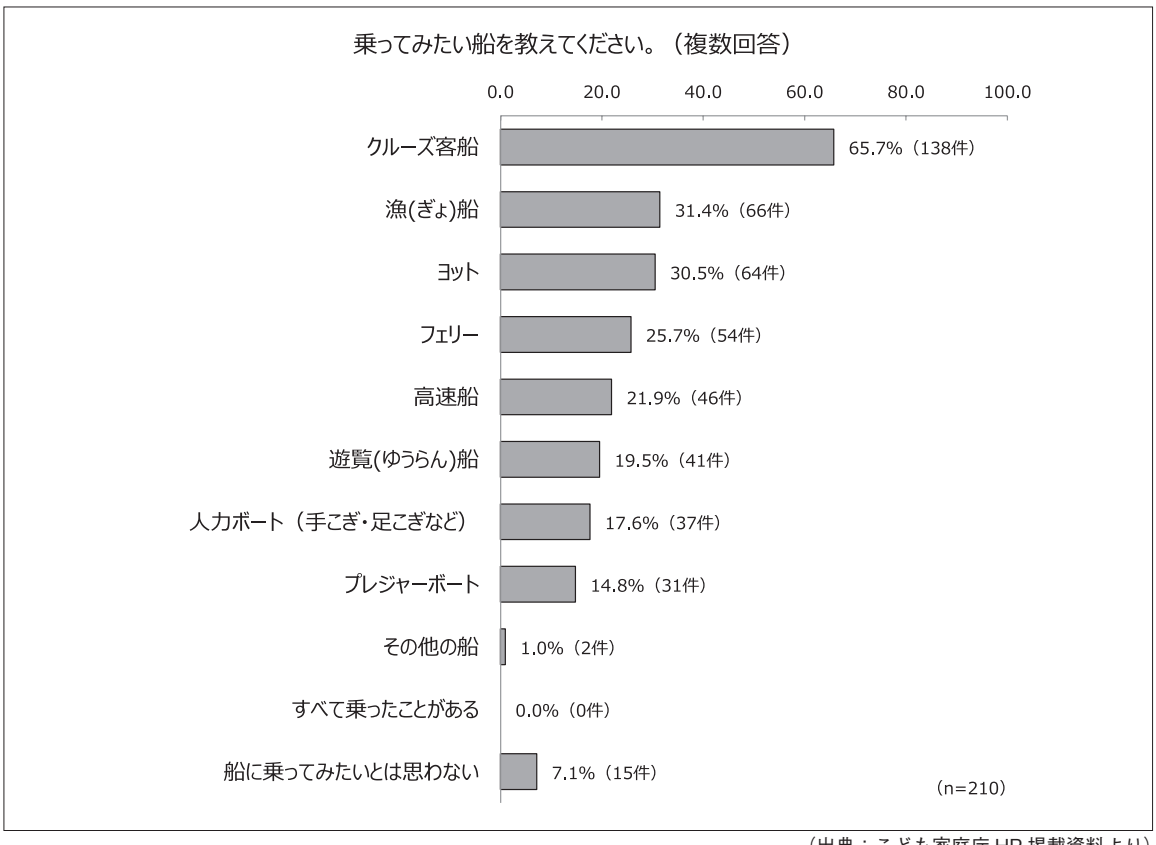


図２

（出典：こども家庭庁 HP 掲載資料より）

水辺の観光まちづくり

文化、環境、防災から見た現状と展望
―観光まちづくりの好事例から考える―



公益社団法人日本観光振興協会
総合調査研究所副所長
● 安本　達式

観光と水との関わりは幅広く、名瀑（めいばく）や雄大な川の流れ、街中を流れる用水路、夕日の沈む海など、水辺の景観を楽しむものもあれば、カヌー、ラフティング、釣り、スキューバーダイビングなど水上や海中のアクティビティもあります。また、名水や地酒、銘茶、魚介類などの飲食、特産品としての関わりもあります。一方で、持続可能な地域づくりに向けては、水およびその環境を観光として活用するとともに保全・保護しなければならないし、津波や豪雨などによる災害に強い観光まちづくりを進めていかなければなりません。

以下、水辺の観光まちづくりの取り組みの現状について、まず文化、環境、防災の三つの観点から、観光と水との関わりや関連する地域の取り組み事例を整理し、今後の課題と展望をまとめます。取り組み事例は、令和4年度に日本観光振興協会で実施した「海事観光の総合的プロモーション事業に関するSDGsを踏まえた海事観光の事例調査」（注1）（以下「海事観光事例調査」）と平成19年より計16回実施してきた産業観光まちづくり大賞（注2）の受賞地（以下「大賞受賞地」）の取り組みから紹介します。

文化からみた水と観光

平成11年度、国土庁（現国土交通省）がまとめた「水文化の保存再生を通じた水源地域の活性化方策（指針）」において、「水文化とは人々が、水を上手に活用し、また水を制する中、長い時間をかけ、生み出されてきた有形、無形の文化や伝統です。各地域はそれぞれ、個性的な水文化を持っています。水文化には祭事や信仰、伝統工芸、水車や堰等の施設などがあげられますが、それに加え、水を中心とした生活パターンや生活様式も水文化ととらえます。」とあります。まさに、水文化は、地域を見つめることで地域らしさを発見することから始まる観光まちづくりにおいて、重要な観光資源となります。水は循環しており、その過程でさまざまな水文化が生まれ、それらを生かすことにより地域固有の観光資源や体験が生まれます。地域の水文化を見つめなおすことは、地域固有の観光価値を発見することにつながります。

第12回大賞受賞地「海女（あま）小屋はちまんかまど」（株式会社兵吉屋・三重県鳥羽市）は、3000年前から行われてきたといわれている海女の文化を伝える観光体験で、三重への旅の目的となるまでに成長しています。平成16年に、実際に使用している海女小屋を日本で初めて開放し、現役の海女さんが米国のお客様を自分たちの獲ってきた海の幸や手作りのお米などでもてなしたことがきっかけとなり、「海女小屋はちまんかまど」での体験サービスが始まりました。新鮮な魚介を提供するとともに、海女の生活や命がけの素潜りでの漁法、漁獲対象とする資源を「獲りすぎないよう」「獲り尽くさないよう」に守り続けていることなどの海女文化を海女さん自らが語る〝本物〟の体験となっています。伊勢志摩は、日本で最も多くの海女が存在する地域であり、「海女小屋はちまんかまど」の事業モデルは、その話題性から、多くの海女小屋で同様の体験サービスが始められ、旅行会社や周辺ホテルなどによる旅行商品化も進み、現在では三重への誘客の柱の一つとなっています。

また、鳥羽市、鳥羽市観光協会、鳥羽磯部漁協による「鳥羽市・漁業と観光の連携促進事業（漁観連携）」や鳥羽市観光協会による「海女さん応援企画プラン～海女さんと出会う旅～」事業が実施されるなど、海女の後継者育成や海女文化の維持に関する活動へとつながっています。鳥羽市では、海女、海の水文化に着目し、それに関わる地域の漁業と観光業が連携することで、地域固有の

観光価値を高める観光まちづくりが展開されています。


海女小屋はちまんかまど「海女着体験（ロシアからのお客様）」

環境からみた水と観光

ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）において、海洋資源に関する目標14は、観光の役割が明記されたターゲットの一つであり、水辺の環境に対する観光の貢献が求められています。また令和元年に観光庁が定めた「日本版持続可能な観光ガイドライン（ＪＳＴＳ－Ｄ）」においては、大カテゴリーの一つ「Ｄ環境のサステイナビリティ」の中の資源マネジメントにおいて、「水資源の管理」「水質」「排水」の三つの水に関する指標が定められています。観光と環境は、切っても切り離せない関係にあり、その中でも水は観光と環境において重要な役割を担っています。

第15回大賞受賞地であり、海事観光事例調査を行った一般社団法人備前観光協会・一般社団法人みんなでびぜん（岡山県備前市）では、海洋教育を通じたＳＤＧｓと観光－里海・里山の自然と共存する観光まちづくりが進められています。「みんなでびぜん」の活動のルーツは昭和60年ごろから日生町の漁師たちが取り組んだ「アマモ場再生活動」にあります。漁獲量の減少が、魚の産卵の場であり稚魚の住処であるアマモ場の減少によるものと気づき、日生漁業協同組合が自主的にアマモ場の再生を開始しました。漁師の高齢化などで人手不足に陥ってからは、地元の中学生が「海洋学習」「環境学習」としてアマモ場再生に取り組むことなどで活動を支え、現在では、漁協、農協、商工団体、観光団体、企業、まちづくり団体、自治会、ＮＰＯ、小・中・高・大学生などのさまざまな団体でその目的を共有した地域全体での取り組みとなっています。

また、「みんなでびぜん」では、日本財団が推進する渚（なぎさ）の交番プロジェクトのもと日生諸島の頭島に令和３年９月にオープンした「ひなせうみラボ」の運営を行っています。「ひなせうみラボ」のコンセプトは「子供たちを海へ」であり、地元の食材を使ったレストランや土産店が入るだけでなく、海洋教育・海洋研究も実施しており、アマモ場の見学や種まき体験、海ごみを利用してハーバリウムを作るアートクラフトなど、多様な体験プログラムを提供しています。主に次世代を担う子供たちを対象に、観光を通じて海に対する関心や好奇心を高める取り組みであり、ＳＤＧｓの目標14「海の豊かさを守ろう」にある、観光開発が破壊されやすい海洋生態系の保全保護を進め、ブルー・エコノミー（環境を損なわない海洋経済）を促進する手段となっているといえます。

防災からみた水と観光

島国である我が国は、水に恵まれ、個性ある水文化を培ってきた半面、地震による津波や豪雨による河川氾濫・土砂崩れなどの水に関わる災害も多く発生し、地域社会および観光地に甚大なる被害をもたらしています。今後、観光による交流人口の拡大・地域活性化に期待が寄せられる我が国においては、一方で、観光客にとっても安心・安全な災害に強い観光まちづくりも求められています。水害から復活した、あるいは克服し、水と共存している地域の知恵を伝承していくことも観光の役割の一つとなります。

海事観光事例調査を行ったＮＰＯ法人体験村・たのはたネットワーク（岩手県田野畑村）では、平成23年の東日本大震災以降、被災体験を風化させず伝えていくために住民自らが体験談を話す「大津波語り部」を始めています。田野畑村は三

陸海岸を代表する景勝地「北山崎」を中心に、通過型から滞在型の観光を目指し「番屋エコツーリズム」をコンセプトとした体験プログラムの開発やガイド人材の育成を行ってきました。NPO法人体験村・たのはたネットワークの前身である「たのはた農村漁村体験推進協議会」が平成16年に設立され、サッパ船と呼ばれる小型漁船で北山崎の岩穴を潜り抜けて、奇岩や断崖絶壁を真下から仰ぎ見る「サッパ船アドベンチャーズ」を実施し、震災前の平成22年には約5000人の乗船を記録しています。大震災では、サッパ船や机浜番屋群が流失するなど大きな被害を受け、サッパ船体験は中止を余儀なくされましたが、人的被害が少なかったこともあり漁師達はいち早く再開に動き、平成23年7月29日には「サッパ船アドベンチャーズ」を再開しています。



みんなでびぜん「アートクラフト」



体験村・たのはたネットワーク「サッパ船アドベンチャーズ」

「大津波語り部」は大震災をきっかけに始められたものですが、大震災以前も昭和8年の津波体験者がその経験を語る「津波語り部」のプログラムが行われていました。大震災での被害が比較的少なかったのは、「過去の津波被害の高さに石碑をたて、これより下に住むな」という先人の教えを忠実に守ってきたからと言われており、また、それを「津波語り部」として語り継いできたことによるといえます。大震災以降は、今度は大震災の経験を風化させず後世に語り継ぐ活動として、体験観光のプログラム「大津波語り部&ガイド」（現在は「大津波語り部」に名称変更）が始まりました。もともと北山崎を中心とする観光地であり、観光収入が地域経済の一役を担っていた田野畑村にとっては、「大津波語り部」が観光客の受け入れの復活と地域経済の活性化につながっています。さらには観光客にとって安全・安心で災害に強い観光まちづくりに寄与するものとなっているといえます。

まとめ

文化、環境、防災の3点から水と観光の関わりとその取り組み事例を紹介しましたが、各地域の取り組みは、もちろん単独の観点に特化したものではなく、複合的な取り組みであり、複合的な価値を観光客が認めることにより実際に来訪する観光地となります。今後の課題・展望として、水辺の観光まちづくりに求められることについて、以下の3点にまとめます。

①地域の生活、産業に根付いた本物を提供するための場づくり

今回取り上げた取り組み事例は、いずれも海に関係するものですが、すべてに漁師、漁業が関わっています。海女小屋、アマモ場の再生、サッパ船のそれぞれの体験は、ともに漁師の生活、生業にもとづいた本物の体験となっています。また本物を提供するために、観光業と漁業が協議する場

の設置や目的の共有が図られ、継続した取り組みとなっていることも共通しています。まずは、地域の観光協会やＤＭＯなどが間に立ち、関係者の議論の場をつくることが求められます。

②地域の合意形成にむけたデータ収集・分析・共有

観光地単位で指標に基づく観光地経営の活動を行うネットワークである「持続可能な観光地づくり国際ネットワーク（ＩＮＳＴＯ）」では、「計測できないものは、改善できない」という思想で、



日本観光振興デジタルプラットフォーム TOP ページ（https://lp.nihon-kankou-dx.info/）

エビデンス・ベースの政策形成を実現することが目的として掲げられています。水辺の観光地においては、観光が水の環境にどのような影響をもたらすのか、前述のＪＳＴＳ－Ｄの水に関する三つの指標のモニタリングが求められますが、その前段としての観光客数や消費額をタイムリーに取得できていないことやデータを収集しても分析にまで至っていないことが、多くの観光地で課題となっています。

現在、都道府県等にて、観光に関連するデータを取得・活用できるＤＭＰ（Data Management Platform）の構築が進められており、日本観光振興協会においても「日本観光振興デジタルプラットフォーム」を構築しています。これらＤＭＰを利用することで今までよりも容易に観光関連データを取得することが可能となります。データ分析に注力できる環境が整ってきており、分析した日々のマーケティングデータや観光による地域経済への効果、地域環境への影響などを関連する組織間で共有することで、地場産業や地域住民との合意形成を進めていくことが求められます。

③短期と中長期の視点からの役割分担

観光庁のＤＭＯ形成・確立の手引きには、ＫＰＩを設定し、ＰＤＣＡサイクルを確立することの必要性が説かれていますが、観光まちづくりにおいては、時間軸の違う二つのサイクルを回していく必要があると考えます。一つは観光マーケティング・マネジメントにおける日々刻々と変化する観光ニーズへ対応する短期的なサイクルであり、もう一つはまちづくりにおける将来のあるべき姿を見据えた中長期的なサイクルです。ＤＭＰなどから常にデータを取得し、マーケットや環境に変化があった場合には、それに応じた施策を即座に打っていく必要がある一方で、５年、10年後にどのような観光地としていくのか、その目標や方針、施策をまとめた観光計画を作成し観光まちづくりを進めていく必要があります。しかし、この二つのサイクルを混同している、あるいはどちらかに偏重している観光地も多くみられます。

例えば、自治体の観光課で観光計画を定め、それに基づいて、観光協会・ＤＭＯなどが日々のマーケティングによる観光事業を進めていくといった役割分担を明確にして観光まちづくりを進めていくことが求められます。そうすることで一過性の取り組みに終わらない計画性・継続性のある観光まちづくりを進めることができます。水辺の観光まちづくりにおいては、文化、環境、防災の行政担当や関連団体とも連携した計画策定と事業実施が求められるといえます。

注１　海洋環境の改善においても観光のチカラを活用し、海事観光を持続可能な観光に変革していくための方策を検討することを目的に、韓国の済州島を含む10地域の関係者等にヒアリング調査を実施。

注２　「産業観光（産業遺産や、現在稼働している工場・工房などを活用した観光）」による観光まちづくりを実践し、他の地域の模範となる優れた事例を表彰する制度で、平成19年度に創設され、令和５年度まで実施。



いばらき

天然色旅

さあ、カメラを持って出掛けよう。











茨城県営業戦略部観光物産課

手前みそですが…

福岡県

糸島市 305

人とまちの魅力が輝く 豊かさ実感都市　いとしま



■芥屋の大門と芥屋集落
糸島半島の突端に日本三大玄武洞の芥屋の大門があり、遊覧船に乗ると、海から柱状節理（溶岩が固まってできる独特の地形）が見事な海蝕洞が見られる

■芥屋の大門

糸島市は、平成22年１月に前原市、二丈町、志摩町が合併し誕生しました。福岡県西部に位置し、北側には玄界灘に面した美しい海岸線が広がり、南側には脊振山系の山々が連なり、それらの中間部はなだらかな田園地帯が広がり、数多くの景勝を見ることができます。

福岡都心から電車で乗り換えなしで訪れることができるため、住みたい街、レジャースポットとして人気があります。海辺にはおしゃれなカフェやレストランが点在。また、工房やクラフトギャラリーを持つ作家さんが多数活躍しています。

「糸島ブランド」として知られる食材は、農産物・海産物だけでなく、伝統的な手法で作られた醤油・酒造なども有名で、食の宝庫として新鮮美味の食材があふれています。冬にオープンする牡蠣小屋では、新鮮な牡蠣を自分で焼いて食べることができ、市内外を問わずたくさんの人でにぎわいます。



■白糸の滝
福岡県の指定名勝で、夏には涼を求め、たくさんの観光客が訪れます。そうめん流しやヤマメ釣りも楽しめます



■櫻井二見ケ浦のしめ縄掛け替え
糸島市の海のランドマークである櫻井二見ケ浦の夫婦岩。年に一度、５月の大潮の日、大しめ縄が氏子らによって掛け替えられる様子は圧巻



■幣の浜の夕日
弓なり６㌔の砂浜が続く遠浅の海岸、幣の浜。夕陽の沈む様は美しく、その視界の先に名勝、芥屋の大門が見える。サーフスポットでもある



■いちご狩り
市内各所の農園でいちご狩りが体験でき、さまざまな品種のいちごを楽しめます



■髙祖神楽
福岡県の指定無形民俗文化財。約 550 年の長い歴史と伝統を誇り、地元の神楽保存会によって伝承されています



■二丈赤米田んぼアート
二丈地域の棚田では古代米の赤米が生産されており、収穫の時期には田んぼアートが楽しめます



■二丈岳山頂
糸島は日帰り登山のスポット。標高 711㍍の二丈岳山頂から眼下に広がる市内の様子は絶景です

地域づくり７月号

2024 年７月１日発行　編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代)
https://www.jcrd.jp/　印刷・製本／株式会社太平印刷社

法律で許可された場合以外に本誌からの無断転載を禁止します
落丁・乱丁はお取り替えします。編集室（03-5202-6139）E-mail：hensyuu6139@jcrd.jp まで、ご連絡下さい。

地域活性化センターからのメールマガジン登録はこちら

地域づくり7月号 特集編（通巻421号） 水辺の観光まちづくり 令和6年7月1日 一般財団法人 地域活性化センター発行


一輪車


宝くじ桜


子宮がん検診車

宝くじは、みんなの暮らしに役立っています。


救急普及啓発広報車


宝くじドリームジャンボ絵本


集会用テント


「健康手帳」（冊子）


ベンチ


リスザル展示施設

宝くじは、少子高齢化対策、災害対策、公園整備、
教育及び社会福祉施設の建設改修などに使われています。

あなたに夢を。街に元気を。
クーちゃん 宝くじ

一般財団法人日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や
公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。

一般財団法人
日本宝くじ協会
https://jla-takarakuji.or.jp/